

〔一・オ〕

黒谷上人語燈錄卷第十三

畎欣沙門了惠集録

和語第二之二 當卷 有四篇

●九條殿下の北政所へ進する御返事第九

●鎌倉の二位の禪尼へ進する御返事第十

●要義問答第十一

●大胡太郎へつかはす御返事第十二

〔一・ウ〕

●九條殿下の北政所へ進する御返事 第九

往生の行には念
仏かめでたきこ
と

かしこまりて申あげ候きてハ御念佛」申させおハしまし候らんこそよにうれし」く候へま事に往生の行にハ念佛かめてた」き事にて候也そのゆへハ彌陀の本願の行」なれハ也餘行ハそれ眞言止觀のたかき行」なりといへとも彌陀の本願にあらす又念佛〔一・オ〕は釋迦如來の付屬の行也餘行ハまことに定」散兩門のめてたき行也といへとも釋尊これを」付屬し給ハす又念佛ハ六方の諸佛の證誠の」行也餘行ハ顯密事理のやんことなき行なり」といへとも諸佛これを證誠し給ハすこのゆへ」に様々の

念仏の行を信じて往生を祈るべし

一向專修がめでたきこと

行おほしといへとも往生のみちに「ハひとへに念佛かすくれたる事にて候也」「二・ウ」しかるを往生のみちにうとき人の申すやうハ」餘の眞言止觀の行にたえざるやすきま、の「つとめてこそ念佛ハあれと申すハきわめ」たるひか事にて候也そのゆへハ餘行をハ彌陀」の本願にあらすときらひすて、又釋尊の「付屬にあらざる行をはえらひと、め又諸佛の證誠にあらざる行をハと、めおさめて「三・オ」いまた、彌陀の本願にまかせ釋尊の付屬により諸佛の證誠にしたかひておろ」かなるわたくしのはからひをハと、めて」これらのゆへつよき念佛の行を信しつと」めて往生をハいのるへしと申す事にて候」也されハ惠心の僧都の往生要集に往生の「業ハ念佛を本とすと申たるハこの心也いまハ「三・ウ」た、餘行をと、め給て一向に念佛になら」せ給ふへし念佛にとりても一向專修の念」佛かめてたき事にて候也そのむねハ三昧」發得の善導和尚の觀經疏に見えて候し」かのミならず雙卷經にハ一向專念無量壽」佛ととき給へりおよそ一向のことハ、二向三」向に對してひとへに餘の行をえらひすて「四・オ」きらひのそく心也君達なんと御いのりの」料なんとも念佛かめてたき事にて候へハ」往生要集に餘行のなかにも念佛すくれ」たるよし見へて候又傳教大師の七難消滅の法にも念佛をつとむへしと見えて」候およそ十方諸佛三界の天衆の擁護し」給ふ行にて候へハ現世後生の御つとめ何事か「四・ウ」これにすき

但念仏

候はんいまハた、一向専修の但「念佛にならせ給ふへく候」

●鎌倉の二位の禪尼へ進する御返事 第十

念仏の功德は仏も説き尽くし難し

御文くハしくうけ給ハリ候ぬさてハ念佛の「功德ハ佛もときつくしかたしとの給へり」又智慧第一の舍利弗多聞第一の阿難も念「佛の功德ハしりかたしとの給ひし廣大善」「五・オ」根にて候へハまして源空なんとハ申つくす「へくも候ハす源空この朝にわたりて候聖教を」随分にひらき見候へとも淨土の教文ハこの朝にわたらすとかんかへ候てわつかに震旦より」とりわたして候聖教の心をたにも一年二年なんとにハ申つくすへくもおほへ候はすさり」なからもおほせかふりて候へハ申のへ候へし「五・ウ」まつ念佛を信せさる人く候ひて申候なる」事ハくまかやの入道つとの三郎ハ無智の」ものなれハこそ餘行をハせさせすして念「佛ハかりをハ法然房ハす、めたれと申候なる」事きわまりなきひか事にて候そのゆへ」ハ念佛の行ハもとより有智無智をえらはす」彌陀のむかしちかひ給ひし本願ハあま「六・オ」ねく一切のためなり無智のためにハ念佛を願」とし有智のためにハ餘行を願とし給ふ事」なし十方世界の衆生のため也有智無智善」人悪人持戒破戒貴も賤も男も女もへたてす」もしハ佛在世の衆生もしハ佛の滅後の衆生」もしハ釋迦の末法萬年の、ち三寶ミなう

念仏の行は有智無智を簡ばず

せ」てのちの衆生^{しゆじやう}までた、念佛はかりこそ現^{げん}「六・ウ」當^{たう}の祈禱^{きたう}とハなり候はめ善導^{せんたう}和尙^{わしやう}ハ彌陀^{みだ}の「化身^{くゑしん}にて一切^{さい}衆生^{しゆじやう}をあはれミ給ひて」一切^{さい}の聖^{しやう}教^{けう}をかんかへて專修念佛^{せんしゆ}をす、め」給へるもひろく一切衆生^{しゆじやう}のため也方便^{ほうへん}の「時節末法^{じせつまつぽう}にあたりていまの教^{けう}これ也され」ハ無智^{むち}の人のミにかきらすひろく彌陀^{みだ}の「本願^{ほんくわん}をたのミてあまねく善導^{ぜんたう}の御心^{ごしん}に「七・オ」したかひて念佛の一門^{もん}をす、め候はん」いかてか無智^{むち}の人のミにかきりて有智^{うち}の^{ひと}を」へたて、往生^{わうじやう}せさせしとハし候はんやもし」しからハ彌陀^{みだ}の本願^{ほんくわん}にもそむき善導^{ぜんたう}の御心^{ごしん}」にもかなふへからすしかれハこの邊^{へん}にまう」てきて往生^{わうじやう}のミちをたつね候にハ有智^{うち}無智^{むち}」を論^{ろん}せすひとへに專修念佛^{せんしゆ}をす、め候なり「七・ウ」さやうに專修念佛^{せんしゆねんぶつ}を申しと、めんとつかま」つる人ハさきの世に念佛三昧^{まい}得道^{とくたう}の法門^{ほうもん}を」きかすしてのちの世に又さためて三惡道^{あくたう}」にかえるへきもの、しかるへくてさやうに申」候也そのゆへハ聖^{しやう}教^{けう}にひろく見えて候也これハ」すなハち修行^{しゆぎやう}する事あるを見てハ毒心^{どくしん}を」おこして方便^{ほうへん}してきおひてあたをなす「八・オ」かくのこときの生^{しやう}盲闇提^{まうぜんたい}のともからは頓教^{とんけう}」を毀滅^{きめつ}してなかく沈淪^{ちんりん}す大地微塵劫^{ちみちじゆせき}を」超過^{てうくわ}すともいまた三途^{さんつ}の身をはなれん事」得^うへからすと、き給へりこの文^{もん}の心ハ淨^{じやう}土^とを」ねかひ念佛^{きやう}を行^{きやう}する人を見てハ毒心^{どくしん}をおこ」しひか事をたくミめくらし様々^{やうやく}の」方便^{ほうへん}をなして專修念佛^{せんしゆ}の行^{きやう}をやふりあた「八・ウ」をなして申と、むるに候也かくのこ

專修念佛に仇を
なす人

誹謗不信の人に
も慈悲を起して
念佛申せ

とくの「人ハむまれてより佛法ぶつぽうのまなこしりて」善根ぜんこんのたねをうしなへる闍提人せんだいじんのと
もか」らなりこの彌陀みだの名號みやうごうをとなへてなかき生しやう」死しをはなれて常住じやうぢゆうの極樂ごくらくに往生わうじやう
すへけれ」ともこの教法けうほうをそしりほろほしてこの「つミによりてなかく三惡道あくたうにしつ
むかくの「九・オ」ことくの人ハ大地微塵劫ちみちんせうをすくれともなかく」三途さんずの身をはなれ
ん事あるへからすと「いふ」也しかれハすなはちさやうにひか事を申「さん人をハかへ
りてあはれミ給ふへき也さ程」の罪人さいじんの申さんによりて專修念佛せんしゆねんぶつに懈怠けたいを「なし念佛
往生わうじやうにうたかひをなし不審ふしんを」いたさん人ハいふにかひなき事にこそ候はめ「九・
ウ」およそ彌陀みだに縁えんあさく往生わうじやう時ときいたらぬ物」ハきけとも信しんせず念佛ねんぶつのものを見て
ハはら」たちこゑをき、てハいかりをなしてあし」き事也なんと申すハ經論きやうろんにも見
へさる事」を申す也御心をえさせ給ひていかに申す」とも御心ハかりハ御變改へんかい候へか
らすあなかに「信しんせさらん人をハ御す、め候へからすほとけな「二〇・オ」をちか
らおよひ給はすいかにいはんや凡夫ぼんぷ」のちからハおよふましく候か、る不信ふしんの衆しゆ」
生しやうをおもへハ過去くわこの父母兄弟親類ふもきやうけいしんるいなりとおほ」しめし候て慈悲しひをおこして念佛申「
て極樂ごくらくの上じやうほんしやうく品上しやうほんしやうく生しやうにまいりてきとりをひら」きて生死しやうじに返かへりて誹謗不信ひはうふしんの人
をも」むかえんとおほしめすへき事にて候也「二〇・ウ」このよしを御心え候へきな
り」

雜行の者を念佛に結縁せんと思ふべし

雜善根

念仏の心を知らず

念仏を申す様

樂行往生

一雜行の人〳〵餘の功德を修せんにハ財寶を」あひ助成しておほしめすへきやうハこ」れハこれ一向專修にて決定して往生すへ」き身也他人のとをきみちをわか近き道ちに」結縁せきせんとおほしめすへき也そのうゑ」に專修をさまたけ候ハさらんハ結縁せんに「一一・オ」とかなし」

一人〳〵の堂をつくり佛をつくり經をかき」僧を供養せんをハよく〳〵心をミたらすし」て信をおこしてかくのことくの雜善根を」も修せしめ給へと御す、め候へし」
一この世のいのりに念佛の心をしらすし」て佛神にも申し經をも誦し書き堂をも「一・ウ」つくらハそれもさきのことく候へしせめてハ」又後世のためにせハこそ候ハめその要なし」とおほせ候へからす專修をさふる行にも」あらさりけりとおほしめし候へし」

一念佛を申す事様々の義候へともた、六」字をとなふるハかりに一切ハおさまりて候」也心にハ願をたのミ口にハ名號をとなへて「一一・オ」手にハかすをとりつねに心にかくるかきわ」めたる決定の業にて候也念佛の行ハもと」より行住坐臥時處諸縁をえらはす身口」の不淨をもきはぬ行にて候へハ樂行往」生とハ申つたへて候也た、しその中にも」心をきよくして申すをハ第一の行と申」候也た、淨土を心にかくれハ心淨の行法に「一一・ウ」て候也かやうに御す、め候へしさやうにつ」ね

に申させ給はんをハとかく申すへき様」候はすわか身もしかるへくて往生このた」ひすへしとおほしめし候へしゆめく」この心よくくつよくならせ給へし」

一念佛の行を信せぬ人にあひて論し又あ」らぬ行の人く」にむかひて執論候へか□す「二三・オ」あなち別に別解異學の人く」を見てハあな」つりそしる事候ましいよ

く」重罪の人」にもなさん事不便に候おなし心に極樂を」ねかひ念佛を申さん人をハたとひ卑賤の」人なりとも父母師匠にもおとらすおほし」めすへし今生の財寶のとも

しからんにも」ちからをくわへ給へしさりなからもすこし「二三・ウ」も念佛に心をかけ候はんをハよくく」す、め」給ふへく候これも彌陀如来の御みやつかへと」おほしめし候へし釋迦如来滅後より」このかた次第に小智小行にまかりなりて」候われも

く」と智慧ありかほに申す人く」ハ」過にて候へしせめてハ録内の經教をたにも」きかす見すいかにいはんや録のほかの經教「一四・オ」を見ざる人の智慧ありかほに申すハ井の」うちのかへるに、たり隨分に震旦日本の」聖教をとりあつめてひら

きかつかへて候」に念佛を信せぬ人ハさきの世に重罪をつ」くりて地獄にひさしくありて又地獄へ」はやく返るへき人也たとひ千佛世にいて、」念佛ハまたく往生の業に

あらずとおしへ「一四・ウ」給ふとも信すへからすこれハ釋迦如来より」はしめて恆

河沙の佛の證誠し給へる事」なれハとおほしめして御心さし金剛」よりもかたくし

一向專修は変改
すべからず

念仏は現当の祈
りとなる

厭うべきは六道
生死、欣うべき
は浄土菩提

て一向專修ハ御變改候へからすもし論し申さん人をハこれへつかはしてたて申さんやうをきけとおほせ候へし様々の要文かきしるしてまいら「二五・オ」すへく候へともた、これにすぎ候まし又「娑婆世界の人ハ餘の淨土をねかはん事ハ」弓なくして天の鳥をとり足なくして「たかき木すゑのはなを、らんとせんかこと」しかならず專修念佛ハ現當のいのりと「なり候也これも經の說にて候也又御うちの」人くくにハ九品の業を人にしたかひてはしめ「二五・ウ」おわりたへ候ひぬへきやうに御す、め候へし」あなかしこく」

● 要義問答 第十一

ま事にこの身にハ道心のなき事とやまひハかりやなけきにて候らん世をいとなむ事」なけれハ四方に馳走せず衣食ともにかけたりといへとも身命をおしむ心切ならねハ「一六・オ」あなかちにうれへとするにおよはす心をや」すぐせんためにもすて候へき世にこそ候」めれいはんや無常のかなしミは目のま」えにミてりいつれの月日をかおハりの時に」期せんさかへあるものもひさしからすい」のちあるものも又うれへありすへていとふ」へきハ六道生死のさかひねかふへきハ淨土菩「二六・ウ」提也天上にむまれてたのしミにほこるといへ」とも五衰退没のくるしミあり人間にむ

ま」れて國王の身をうけて一天下をしたかふと」いへとも生老病死愛別離苦怨憎會苦一事」もまぬかる、事なしたとひこれらの苦」なからんすら三惡道に返るおそれあり」心あらん人いか、いとほさるへきうけかた「一七・オ」き人界の生をうけてあひかたき佛教に」あふこのたひ出離をもとめさせ給へ」

問おほかたさこそおもふ事にて候へとも」かやうにおほせらる、ことはにつきて左」右なく出家をしたりとも心に名利を」はなれたる事もなく無道心にて人に謗」をなされん事いか、とおほへ候在家にあり「一七・ウ」ておほくの輪廻の業をまさんよりハよき」事にてや候へき」

答たわふれにあまのころもをき酒にゑひ」て出家をしたる人ミな佛道の因となり」きと舊き物にもかきつたへられて候往生」十因と申す文にハ勝如聖人の父母ともに」出家せし時おとこハとし四十一妻ハ三十「一八・オ」三なり修行の僧をもて師としき師ほめ」ていはく衰老にもいたらす病患にものそ」ますいま出家をもとむこれ最上の善根」也とこそハいひけれ釋迦如来當來導師」の慈尊に付屬し給ふにも破戒重惡の」ともからなりといふとも頭をそり衣をそ」め袈裟をかけたらんものをハミななんち「一八・ウ」につくとこそハおほせられて候へされハ」破戒なりといへとも三會得脱なをたのミ」ありある經の文にハ在家の持戒にハ出家」の破戒ハすくれたりとこ

生死を離れる道

『安樂集』

聖道門・難行道

淨土門・易行道

そハ申て候へま」ことに佛法流布の世にむまれて出離しゅつりの道をしりて解脱幢相の衣けたつとうきやうころもをかたに」かけ釋しやくし氏につらなりて佛法修行せき「一九・オ」らんハマことにたからやまの山に入りて手てをむ」なしくして返かへるためし也」

問まことに出家しゅつげなんとしてハさすかに生死しやうしをはなれ菩提ぼだいにいたらん事をこそハいと」なみ候へいかやうにかつとめいかやうにか」ねかひ候へき」

答安樂集こたうあんらくしゆにはく大乘じやうのしやうけう 聖教しやうけうによるに二種しゆ「一九・ウ」の勝法しやうほうあり一に八聖道しやうたう二にハ往生淨土わうしやうじやうと也」穢土えとのなかにしてやかて佛果ぶつぐわをもとむる」ハミな聖道門しやうたうもん也諸法しよほうの實相じつさうを觀くわんして證しやうをえんとし法華三昧ほつげまいを行きやうして六根清こんしやう淨じやうをもとめ三密みつの行法きやうほうをこらして即身そくしんに成佛しやうぶつせんとおもひあるいハ四道果したうぐわをもと」め又三明みやう六通つうをねかふこれミな難行道なんきやうたう也「二〇・オ」往生淨土門わうしやうじやうともんといふハマつ淨土じやうとへむまれて」かしこにてざとりをもひらき佛ほとけにもな」らんとおもふ也これハ易行道いきやうたうといふ生死しやうしを」はなる、みちくおほしいつれよりもいら」せ給へ」

問これハわれらかこときのおろかなるもの」ハ淨土じやうとの往生わうしやうをねかひ候へきかいかん

「二〇・ウ」

答安樂集こたうあんらくしゆにはく聖道しやうたうの一種しゆハいまの時に」ハ證しやうしかたし一にハ大聖たいしやうをさる事はる

か」にとをきによる二にハ理りハふかくしてざと」りハすくなきによるこのゆへに大集だいしゆ

『安樂集』

諸教所讚多在
陀
『往生要集』

極樂はこの土に
縁深く、弥陀は
有縁の教主

月藏」經にいはいはくわか未法の時の中の億々の衆」修行をおこし道を修するにいまた一人も」うる物ハあらずまさにいま末法五濁悪世也「二一・オ」た、淨土の一門のミありて通入すへきみ」ち也こ、をもて諸佛の大悲淨土に歸せよ」とす、め給ふ一形惡をつくれともた、よく」心をかけてま事をもはらにしてつねに」よく念佛せよ一切のもろくのさハリ自然に」のそこりてきたためて往生をうなんそ思ひ」はからずしてさる心なきやといへり永觀「二一・ウ」のいはく眞言止觀ハ理ふかくしてさとり」かたく三論法相ハ道かすかにしてまとひ」やすしなんと候まことに觀念にもたへす」行法にもいたらざらん人ハ淨土の往生をと」けて一切の法門をもやすくさとらせ給はん」はよく候ひなんとおほへ候」問十方に淨土おほしいつれをかねかひ候へき「二二・オ」兜率の往生をねかふ人もおほく候いか、思」ひきため候へき」答天台大師の、給はく諸教所讚多在彌陀」故以西方而爲一順と又顯密の教法の中に」もはら極樂をす、むる事稱計すへからず」恵心の往生要集に十方に對して西方を」す、め兜率に對しておほくの勝劣をたて「三一・ウ」難易相違の證據ともをひけりたつね御」らんせさせ給へ極樂この土に縁ふかし彌陀ハ」有縁の教主也宿因のゆへ本願のゆへた、西方」をねかはせ給へきとそおほへ候」

問まことにきてハひとすちに極樂をねかふへ」きにこそ候なれ極樂をねかはんはいつれ」の行かすくれて候へき

「二三・オ」

五種正行

答善導釋しての給ハく行に二種あり一」にハ正行二にハ雜行正の中に五種あり一

にハ」禮拜の正行二にハ讚嘆供養の正行三には讀誦の正行四には稱名の正行五に

ハ觀察の正」行也一に禮拜の正行といハ禮せんにハすなハち」かのほとけを禮して

餘禮をましへされ二に」讚嘆供養の正行といハ讚嘆せんにハすなハち「二三・ウ」か

のほとけを讚嘆供養して餘の讚嘆を」ましへされ三に讀誦の正行といハ讀誦せん」に

ハ彌陀經等の三部經を讀誦して餘の」讀誦をましへされ四に稱名の正行といハ稱

せんにハすなハちかのほとけを稱して餘の」稱名をましへされ五に觀察の正行とい

ハ憶念觀察せんにハかの土の二報莊嚴等を觀」「二四・オ」察して餘の觀察をま

しへされこの五種」を往生の正行とすこの正行の中に又二あり」一にハ正二にハ助

也稱名をもてハ正とし禮誦」等をもてハ助業となつくこの正助二行を」のそきて自

餘の修善ハミな雜行となつく」又釋していはく自餘の衆善ハミな善と」なつくといへ

とも念佛にたくらふれハまたく」「二四・ウ」比校にあらすとの給へり淨土をねかは

せ」給ハ、一向に念佛をこそハ申させ給ハめ」

正助二行

諸教の中に淨土に往生すべき功力

問餘行を修して往生せん事ハかなひ候」ましやされとも法華經に即往安樂世界」阿彌陀佛所といひ密教の中にも決定往生」の眞言あり諸教の中に淨土に往生すへ」き功力をとけり又穢土の中にして佛果に「二五・オ」いたるといふかたき徳をたに具せらん教を修」行してやすき往生極樂に迴向せハ佛果に」かなふまでこそかたくとも往生ハやすく候」へきとこそおほへ候へ又おのつから聽聞な」んとにうけ給ハるにも法華念佛ひとつ物」と釋せられ候ならへて修せんになにかくる」しく候へき

「二五・ウ」

「双卷經」

「觀經」

「觀經疏」

答 雙卷經に三輩往生の業をときてともに」一向專念無量壽佛との給へり觀無量壽經にもろくの往生の行をあつめてとき給」におハりに阿難に付屬し給ふところにハ」なんちこの語をたもてこのことはをたもて」といふハ無量壽佛の名をたもつ也と、き給ふ」善導觀經を釋しての給ふに定散兩門「二六・オ」の益をとくといへとも佛の本願にのそむ」れハ一向にもはら彌陀の名號を稱せしむ」るにありといふおなしき經の文に一々の光」明ハ十方世界の念佛の衆佛ををてらして」攝取してすて給ハすと、けり善導釋」しての給ハく餘の雜業のものををてら」し攝取すといふ事をハ論せずと候餘行「二六・ウ」のものハふつとむまれすといふにあらす」善導も迴向してむまるへしといへとも」もろくの疎雜の行となつくとこそハおほ」せられたれ

『往生要集』

道綽禪師・善導
大師

恵心僧都・永観
律師

『観経』は観仏
三昧と念佛三昧
を宗とす

往生わうしやう要集ようじつの序しよにも顯密けんみつの「教法けうぽうその文もんひとつにあらす事理しりの業因ごういん」その行ぎやうこれおほし利智りち精進しやうじんの人ひと「いま」たかたしとせず子よかこときの頑魯くわんろの物もの「二七・オ」あにたやすからんやこのゆへに念佛ねんぶつの「一門もんによりて經論きやうろんの要文ようもんをあつむこれ」をひらきこれを修しゆするにさとりやすく「行ぎやうしやすしといふこれらの證據しやうこあきら」めつへし教けうをえらふにハあらず機きをはか「らふ也わかちからにて生しやう死じをはなれん事」はけミかたくしてひとへに他力たうりきの彌陀みたの「二七・ウ」本願ほんくわんをたのむ也先德せんてくたちおもひはから「ひてこそハ道綽たうしやくハ聖道しやうたうをすて、淨土しやうとの門もんにいり善導せんたうハ雜行さうぎやうをと、めて一向かう」に念佛ねんぶつして三昧さいをえ給たまひき淨土しやうとの「祖師そし次第しだいにあひつけりわつかに一兩りやうを」あくこの朝あすにも恵心ゑしん永観やうくわんなんといふ自し「宗他しうた宗しうひとへに念佛ねんぶつの一門もんをす、め給へ「二八・オ」り專雜せんざう二修しゆの義ぎはしめて申まをにおよは「す淨土しやうとの文もんおほしこまかに御らんす」へし又また即身得道そくしんとくだうの行ぎやう往生わうしやう極樂ごくらくにおよ「はさらんやと候ハ大事だいじにいはれたるやうに」候へともなにも宗しうと申まをす事の候きりそか「し善導ぜんたうの觀經くわんきやうの疏しよにいはく般若經はんにやきやうの」こときハ空惠くうゑをもて宗しうとす維摩經ゐまきやうのこ「二八・ウ」ときハ不思議ふしぎ解脫げだつをもて宗しうとすいまこの「觀經くわんきやうハ觀佛くわんぶつ三昧さいをもて宗しうとし念佛ねんぶつ三昧さい」をもて宗しうとすといふかことき法華ほつげハ眞しん如によ實じつ相平さうへい等の妙理めうりを觀くわんして證しやうをとる「現身けんしんに五品六根ごほんろくこんの位くらゐにもかなふこれらを」もて宗しうとす又眞言しんごんにハ即身成佛そくしんしやうぶつをもて「宗しうとす法華ほつげにもおほくの功力くりきをあけ「二九・オ」

て經をほむるついでに即往安樂とも」いひ又即往兜率天上ともいふこれハ便宜」の説也往生をむねとするにハあらず眞言」又かくのことし法華念佛一つなりといひ」てならへて修せよといはハ善導和尚ハ法華」維摩等を誦しき浄土の一門にいりにし」よりこのかた一向に念佛してあえて餘の「二九・ウ」行をましふる事なかりきしかのミなら」す浄土宗の祖師あひついでミな一向に名」號を稱して餘業をましへされとす、む」これらを案して専修の一行にいらせ給へ」と申すなり」

問浄土の法門にまつなにくを見て心つ」き候なん

「三〇・オ」

答經にハ雙卷觀無量壽小阿彌陀經等こ」れを浄土三部經となつく文にハ善導の」觀經の疏六時禮讚觀念法門道綽の安樂慈恩の西方要決懷感の群疑論天」台の十疑論わか朝の人師にハ惠心の往生要」集なんとこそはつねに人の見るものにて」候へた、しなにを御らんせすともよく御「三〇・ウ」心えて念佛申させ給ひんに往生な」に」事かうたかひ候へき」

問心をはいかやうにかつかひ候へき」

安心一心遣いの
ありさま
三心一善導の釈

至誠心

答三心を具足せさせ給へその三心と申すは」一にハ至誠心二にハ深心三にハ廻向發願心なり」一に至誠心といふハ眞實の心也善導釋して」の給ハく至といふハ眞の

義誠ぎしやうといふハ實じつの義ぎ「三二・オ」眞實しんじつの心しんの中になかこの自他したの依正えしやう二報ほうをいととひす
て、三業さんごうに修しゆするところの行業こうごうにかかならず眞實しんじつをもちるよほかに賢善精けんぜんしやう進しんの相さう
を現けんして内うちに虚假こけをいたく物もの八日にちや夜十二時しにつとめおこなふ事ことかうへの火ひをはら
ふかことくにすれとも往生わうじやうをえすと「いふた、内外明闇ないけみやうあんをえらはす眞實しんじつをもち
「三二・ウ」ゐるゆへに至誠ししやうしん心しんとなつて二にに深心しんくといふ□「ふかき信也しん決定けつちやうしてふか
く信しんせよ自身ししん」ハ現けんにこれ罪惡ざいあく生死しじやうしの凡夫ほんふ也曠くわう劫こつよりここのかたつねにしつみつね
に流轉るてんして出離しゆつりの緣えんある事ことなし又決定けつちやうしてふふかく信しんせよこのあミたほとけ四十
八願くわんをもて衆生しゆじやうを攝受せうじゆしてうたかひなくう「三二・オ」らもひなくかの願くわん力りきにの
りてきためて往生わうじやうすとあふきねかはくハほとけのことははをハ信しんせよもし一切さいの智ち
者しや百千萬人ひやくまんにんきたりて經論きやうろんの證しやうをひきて一切さいの凡夫ほんふ念佛ねんぶつして往生わうじやうする事をえすと
いはんに一念いんぱんの疑退ぎたいの心しんをおこすへからすた、こたへてい「ふへしなんちかひくと
ころの經論きやうろん信しんせざる「三二・ウ」にハあらずなんちか信しんするところの經論きやうろんハ「なん
ちか有緣うえんの教けうわか信しんするところハわか有う緣えんの教けういまひくところの經論きやうろんハ菩薩ぼさつ人天にんてん
等とう」に通つうしてとけりこの觀經くわんきやう等の三部ふ八濁ちやく惡あく不善ふぜんの凡夫ほんふのためにとき給たまふしか
れハかの經きやうをとき給たまふ時にハ對機たいきも別べつに所ところも別べつに利益りやくも別べつなりきいままきみかう
たかひをき「三三・オ」くにいよ信しん心を増長そうちやうすもし羅漢らかん辟支ひやくし佛ぶつ初地しよちの菩ぼ

廻向發願心

二河白道

火の河・水の河

白道

薩十方にミち化佛報佛」ひかりをか、やかし虚空にしたをはき」て生まれすとの給ハ、又こたへていふへし」一佛の説ハ一切佛の説におなし釋迦如來の」とき給ふ教をあらためは制し給ふところ」の殺生十惡等のつミをあらためて又お「三三・ウ」かすへしやさきのほとけそら事し給」ハ、のちのほとけも又そら事し給ふへし」おなし事ならはた、しそめたる法」をハあらためしといひてなかく退する」事なかれかるかゆへに深心也三に廻向發願」心といふハ一切の善根をことくくミな廻向し」て往生極樂のた□とす決定眞實の心のう「三四・オ」ちに廻向してむまる、おもひをなすなり」この心深信なる事金剛のことくにして」一切の異見異學別行人等に動亂破壊せら」れされいまさらに行者のために一つのたとへをときて外邪異見の難をふせかん人」ありて西にむかひて百里千里をゆくに」忽然として中路に二つの河あり一つハ「三四・ウ」これ火のかわみなミにあり二つハこれ水の」かわきたにありおのくひろさ百歩ふかく」してそこなしまさに水火の中間に二つの白き道ありひろさ四五寸ハかりなる」へしこのミちひんかしのきしより西の」岸にいたるまでなかさ百歩そのミつの波」浪交過して道をうるをす火焰又きた「三五・オ」りて道をやく水火あひましハりてつ」ねにやむ事なしこの人すてに空曠の」はるかなるところにいたるに人なくして」群賊惡獸ありこの人のひとりゆくを見」てきをひきたりてころさんとす

一種としても死
を免れず

東の岸

西の岸

西の岸に到りて
難を離れる

この人」死をおそれた、ちにはしりて西に」むかふ忽然としてこの大河を見るにす
な「三五・ウ」ハち念言すらく南北にほとりなし中」間に一つの白道を見るきわめ
て狭少也二」つの岸あひさる事ちかしといへともい」か、ゆくへき今日さためて死せ
ん事うた」かひなしまさしく返らんとおもへハ群賊」悪獸やうやくきたりてせむ南北
にさりは」しらんとおもへハ悪獸毒虫きおひきたりて「三六・オ」われにむかふまさ
に西にむかひて道をた」つねてしかもさらんとおもへハおそらく」ハこの二つの河に
おちぬへしこの時おそる、「事いふへからすすなハち思念すらく返るとも」死し又さ
るとも死せん一種としても死をま」ぬかれさるもの也われむしろこのミちを」たつね
てさきにむかひてさらんすてにこの「三六・ウ」みちありかならずわたるへしこのお
もひ」をなす時に東の岸にたちまちに人のす、「むるこゑをきくきみ決定してこの
みち」をたつねてゆけかならず死の難なけん」住せはすなハち死なん西の岸のうゑに
人あ」りてよはひていはくなんち一心にまさし」く念してみちをたつねて直にす、ミ
て疑「三七・オ」怯退心をなさ、れとあるいハ一分二分ゆくに」群賊等よはひていは
くきミ返りきたれか」のミちハはけしくあしきみち也すくる事」をうへからす死なん
事うたかひなしわれ」らか衆ハ悪心なしとこの人よはふこゑをきく」といへともかえ
り見す直にす、みて道を念し」てしかもゆくに須臾にすなはち西の岸「三七・ウ」に

いたりてなかくもろくの難をはなる善友あひむかひてよろこひやむ事なし」これ
 八たとへ也次にたとへを合すといふ八東の岸といふハすなはちこの娑婆の火宅に
 たどふる也群賊悪獸いつハリちかつくといふハすなはち衆生の六根六識六塵五陰
 四大也人なき空迥の澤といふハすなち悪友にしたかひ「三九・オ」てまことの善
 知識にあはさる也水火の二河と「いふハすなはち衆生の貪愛ハ水のことく瞋恚」ハ火
 のことくなるにたとふる也中間の白道四「五寸といふハ衆生の貪瞋煩惱の中によ
 清」淨の願往生の心をなす也貪瞋心わきによる「かゆへにすなはち水火のことしと
 たとふる」也願心すくなきかゆへに白道のことしとたと「三八・ウ」ふる也水波つ
 ねにみちをうるおすといふハ愛心」つねにおこりて善心を染汚する也又火焰つ」ねに
 道をやくといふハ瞋嫌の心よく功德の」法財をやく也人ミちをのほるに直に西にむ
 かふといふハすなはちもろくの行業をめぐ」らして直に西にむかふにたとふる也
 東の岸」に人のこゑのすめやるをききて道をたつね「三九・オ」て直に西にす、
 むといふハすなはち釋迦ハすて」に滅し給ひてのち人見たてまつらされ」ともなを教
 法ありてたつねつへしこれを」こゑのことしとたとふる也あるいハゆく事一分二分
 するに群賊等よひ返すといふハ別解別」行悪見人等みたりに見解をときてあひ惑
 亂しおよひみつから罪をつくりて退失する「三九・ウ」にたとふる也西の岸のうゑに

釈迦の發遣・弥陀の召喚
願力の道

還相迴向

一心不乱の念仏

人ありてよハふ」といふハすなハち彌陀の願の心にとふる也須^{しゆ}。輿^ゆにすなハちにしのきしにいたりて善友^{ぜんゆう}。あひ見てよろこふといふハすなはち衆生^{しゆじやう}ひさ。しく生死^{しやうじ}にしつミて曠^{くわう}劫^{けつ}に輪迴^{りんゑ}し迷到^{めいたう}。しみつからまとひて解脱^{けつたつ}するによしなし。あふきて釋^{しゃ}迦^か發遣^{はつけん}して西方^{さいほう}にむかハしめ「四〇・オ」給^{たま}ふ彌陀^{みた}の悲心^{ひしん}まねきよはひ給^{たま}ふによりて「二尊^{そん}の心に信順^{しんしゆん}して水火^{すいくわ}の二河^{にか}をかえり」見^みす念々^{ねんく}にわする、事^{こと}なくかの願力^{くわんりき}の道^{みち}」に乘^まじていのちをすておハりてのちかのくに「にむまる、事をえてほとけを見たてまつ」りて慶^{きやう}喜^きする事^{こと}きはまりなからん行^{ぎやう}。者行^{しやぎやう}住坐^{じゆざ}臥^ふの三業^{さんごう}に修^{しゆ}するところ晝夜^{ぢやうや}時^じ「四〇・ウ」節^{せつ}を問^とふことなくつねにこのさとりをなし。このおもひをなすかゆへに迴向^{ゑかう}發願^{はつがん}心^{しん}といふ又^{また}迴向^{ゑかう}といふはかのくに、むまれおハりて「大悲^{たいひ}をおこして生死^{しやうじ}に返^{かへ}りりて衆生^{しゆじやう}を」教化^{けうげ}するを迴向^{ゑかう}となつく三心^{さんしん}すてに具^くす。れハ行^{ぎやう}として成^{じやう}せずといふ事^{こと}なし願^{くわん}行^{ぎやう}。すてに成^{じやう}してもしむまれすといハ、この「四一・オ」ことほりある事^{こと}なけん。已^い上^{じやう}善導^{ぜんだう}の釋^{しやく}の文^{もん}なり」

問阿彌陀經^{もんあみたきやう}の中に一心^{しんふ}不亂^{らん}と候^{こう}ぞかしな。これ阿彌陀佛^{あみたほとけ}を申^{まを}さん時餘^{ときよ}事^じをすこし。もおもひませ候^{こう}ましきにや一^{いっ}こゑ念佛^{ねんぶつ}申^{まを}さん程物^{ほどもの}をおもひませざらん事^{こと}ハやすく候^{こう}へ。は一^{いっ}念往生^{ねんわうじやう}にハもる、人候^{ひとこう}へしとおほへ候^{こう}又^{また}「四一・ウ」いのちのおハるを期^ことして餘念^{よねん}なからん事^{こと}。ハ凡夫^{ほんふ}の往生^{わうじやう}すへき事^{こと}にても候^{こう}はすこの「義^ぎいか、心え候^{こう}へ

本願の三心と
『觀經』の三心

き」

答善導この事を釋しての給はくひとた」ひ三心を具足してのちミたれやふれさる事」

金剛のごとくにていのちおハるを期とする」をなつけて一心といふに候阿彌陀佛の本

願「四二・オ」の文に設我得レ佛十方衆生至一心信樂欲レ生二我」國一乃至十念

若不レ生二者不レ取正一覺一といふこの文」に至一心といふハ觀經にあかすところの

三心の中」の至誠心にあたれり信樂といふハ深心にあた」れり欲生我國ハ廻向發

願心にあたれりこ」れをふさねていのちおハるを期としてみた」れぬものを一心と

ハ申す也この心を具せんもの「四二・ウ」もしハ一日二日乃至十聲一聲にかならず

往」生ずる事をうといふいかてか凡夫の心に散亂」なき事候へきされハこそ易行道

とハ申す」事にて候へ雙卷經の文にハ横截五惡趣々々」自然閉昇道無窮極易往而無

人と、けり」ま事にゆきやすき事これにすきたるや」候へき劫をつミてむまるとい

は、いのちもみ「四三・オ」しかく身もたへさらん人いか、とおもふへきに」本願に

乃至十念といふ願成就の文に乃至一」念もかのほとけを念して心をいたして廻向」

すれハすなハちかの國にむまる、事をうと」いふ造惡のものむまれすといは、觀經

の文」に五逆の罪人むまると、くもし世もくた」り人の心もおろかなる時ハ信心うす

くして「四三・ウ」むまれかたしといは、雙卷經の文に當來之」世經道滅盡我以慈

『双卷經』

『觀經』

『双卷經』

悲哀愍特留此經「止住」百歲其有衆生「值此經者隨意所願皆可得」度云その時の衆生は三寶の名をきく事なしもろくの聖教ハ龍宮にかくれて一卷もと、まる物なした、邪惡無信のさかりなる衆生のミありミな惡道におちぬへし「四四・オ」彌陀の本願をもて釋迦の大悲ふかきかゆへ」にこの教をと、め給へる事百年也いはんや」このころハこれ末法のはしめ也萬年の、ち」の衆生におとらんやかるかゆへに易往といふし」かりといへともこの教にあふ物ハかたし又お」のつからきくといへとも信する事かたきか」ゆへにしかも無人といふ事にことハリなる「四四・ウ」へし阿彌陀經にもしハ一日もしハ二日乃至七日」名號を執持して一心不亂なれハその人命終」の時に阿彌陀佛もろくの聖衆と現にその」人のまえにましますおはる時心顛倒せ」すして阿彌陀佛の極樂國土に往生する」事をうといふこの事をとき給ふ時に釋迦」一佛の所説を信せさらん事をおそれて六方「四五・オ」の如來同心同時におのく廣長の舌相をいた」してあまねく三千大千世界におほひて」もしこの事そら事ならはわかいたすと」ころの廣長の舌やふれた、れて口にいる事」あらしとちかひ給ひき經文釋文あらハ也」又大事を成し給ひし時ハミな證明ありき」法華をとき給ひし時ハ多寶一佛證明し「四五・ウ」般若をとき給ひし時ハ四方佛證明し」給ふしかりといへとも一日七日の念佛のこことく」證誠のさかりなる事ハなしほ

とけもこの「事を大事におほしめしたるに」こそ候めれ」

問信心のやうハうけ給ハリぬ行の次第いか、「候へき

〔四六・オ〕

長時修

答四修をこそハ本とする事にて候へ一には「長時修乃至四にハ無餘修也一に長時修

といふハ慈恩の」西方要決にはく初發心よりこのかたつねに退轉なき也善導ハい

のちのおはるを期と」して誓て中止せされといふ二に恭敬修と」いハ極樂の佛法僧

寶においてつねに憶念して尊重をなす也往生要集にあり「四六・ウ」又要決にい

はく恭敬修これにつきて五」あり一にハ有縁の聖人をうやまふ二にハ有縁の聖

教をうやまふ三にハ有縁の善知識」をうやまふ四にハ同縁の伴をうやまふ五に」ハ三

寶をうやまふ一に有縁の聖人をうやまふといふハ行住坐臥に西方をそむかす涕」

唾便利に西方にむかハされといふ二に有縁の「四七・オ」像と教とをうやまふといふ

ハ阿彌陀佛の像」をつくりもかきもせよひろくする事あ」たハすハ一佛二菩薩をつく

れ又教をうやまふといふハ彌陀經等を五色のふくろにいれ」てみつからもよミ他

をおしへてもよませよ」像と經と室のうちに安置して六時に禮讚し香花を供養すへ

し三に有縁の善知識「四七・ウ」をうやまふといふハ淨土の教をのへんものをは」

もしハ千由旬よりこのかたならひに敬重し」親近供養すへし別學のものをも惣して」

恭敬修

『西方要決』

うやまふ心をおこすへしもし輕慢をなき」ハ罪をうる事きわまりなしす、みても」衆生のために善知識となりてかならず西方に歸する事をもちるよこの火宅に住せ「四八・オ」は退没ありていかたきかゆへ也火界の」修道はなハたかたかるへきかゆへに西方に歸」せしむひとたひ往生をはつれハ三學自」然に勝進して萬行ならひにそなハるか」ゆへに彌陀の淨國ハ造惡の地なし四に同緣」のともをうやまふといふハおなしく業を修」する物也みつからハさハリおもくして獨業「四八・ウ」成せすといへともかならずよきともにより」てまさに行をなすあやうきをたすけあや」うきをすくふ事同伴の善緣也ふかくあひ」たのミておもくすへし五に三寶をうやま」ふハ繪像木佛三乘の教旨聖僧菩薩」破戒のともからまてうやまひをおこし慢」を生ずる事なかれ木のかたふきたるは「四九・オ」たうる、にまかれるによるかことし事の」さハリありて西にむかふにおよはすハた、」西にむかふおもひをなすへし三に無間修」といふハ要決にはくつねに念佛して往生の」心をなせ一切の時にいて心につねにおもひ」たくむへしたとへハもし人他に抄掠せられ」て身下賤となりて艱辛をうくたちまち」に「四九・ウ」父母をおもひて本國にはしり返らんと思ふ」ゆくへきはかり事いまたわきまへすして」他郷にあり日夜に思惟するくるしミたへし」のふへからず時として本國をおもはずとい」ふ事なしはかり事をなす事をえて」すてに返り

無餘修

專修百即百生、
雜修千中無一

念仏と魔縁―諸
仏菩薩の護念

て達する事をえて父母に親近しほしきまゝに歡娛することし行者も「五〇・オ」又しか也往因の煩惱に善心を壞亂せられて「福智の珍財ならひに散失してひさしく生死にしつミて六道に駈馳しくるし身」心をせむいま善縁にあひて彌陀の慈父をき、てまさに佛恩を念して報盡を期として心につねにおもふへし心々相續して「餘業をましへされ四に無餘修といふハ要決に「五〇・ウ」いはくもはら極樂をもとめて禮念する也」諸餘の行業を雜起せされ所作の業は日別に念佛すへし善導の、給ハくもはらかの」ほとけの名號を念しもはらかのほとけおよ」ひかの土の一切の聖衆等をほめて餘業を」ましへされ專修のものハ百ハすなハち百なか」らむまれ雜修のものハ百か中にわつかに一二「五・オ」也雜縁にちかつきぬれハみつからもさへ他の」往生の正行をもさふる也われみつから諸方を」見きくに道俗の解行不同にして專雜こと」也た、心をもはらになすハ十八すなハち十」なからむまる雜修のものハ千か中に一つもえ」すといふ又善導の御弟子釋しての給ハく」西方淨土の業を修せんとおもはん物ハ四修「五・ウ」おつる事なく三業ましわる事なくし」て一切の諸願諸行を廢してた、西方の一行一願を修せよとこそ候へ」

問一切の善根ハ魔王のためにさまたけらる」これハいか、して對治し候へき」

答魔界といふ物は衆生をたふろかす物也」一切の行業ハ自力をたのむゆへ也念佛の

弥陀の事には魔
事なし

念仏の滅罪

念仏は観念の念
にあらざ、称名
なり

行□やう「五二・オ」者ハ身をハ罪惡生さいあくしやうし死□んふの凡夫とおもへハ自力を」たのむ事なくして

た、彌陀の願力くわんりきにのりて」往生わうしやうせんとねかふに魔縁まえんたよりをうる事なし」觀惠くわんゑをこ

らす人ひとにもなを九境くきやうの魔事ましあり」といふ彌陀ミタの一事しにハもとより魔事ましなし果くわ」人清にんじやう

淨くなるかゆへにといへり佛ぼつをたふるかす」魔縁まえんなけれハ念佛ねんぶつのものをハさまたくへか

「五二・ウ」らす他力たうりきをたのむによるかゆへ也ひやくちやういし百丈ひやくぢやうの石いし」を船ふねにおきつれハ萬里ばんりの大

海かいをすくるか」ことし又念佛ねんぶつの行者きやうじやのまへにハ彌陀觀音ミタクワンをん」つねにきたり給ふ二十五

の菩薩ぼさつ百重ちゆうせん千」重ちゆうに圍繞ねうご護念ごねんし給ふにたよりをうへか」らす」

問阿彌陀佛を念するにいかはかりのつみを「五三・オ」か滅めつし候こ」

答一念ねんによく八十億劫おおくじやうの生しやう死しの罪つみを滅めつすと」いひ又但聞たゞきくに二佛名ふつたう二菩薩ぼさつ名な一除をのぞく二無りやう量りやう

劫こう生しやう死し之し」罪つみ一つみなんと申候まをさしそかし」

問念佛と申候ハ佛の色相しきさうを念ねんし候こか」

答佛ぼつの色相しきさう光明くわうみやうを念ねんするは觀佛くわんぶつ三昧さいなり」報身ほうしんを念ねんし同體どうたいの佛性ふつしやうを觀くわんするハ智ちあ

「五三・ウ」さく心こころすくなきわれらハ境界きやうがいにあらす善ぜん」導たうの給さうハく相さうを觀くわんせずして

た、名な字じを」稱せうせよ衆生しゆじやうさハリおもくして觀成くわんじやうする」事ことかたしこのゆへに大聖だいじやうあ

れミをたれ」て稱名しやうみやうをもハらにす、め給こころへり心こころかすかに」してたましる十方はうにとひ

ちるかゆへ也なりといへり又本願ほんぐわんの文もんを善導ぜんたう釋しやくしての給さうハく若にやく」五四・オ」我成かじやう佛ぶつ十

方衆生願生我國稱我名號下至」十聲乘我願力若不生者不取正覺彼佛今」現
在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念」必得往生とおほせられて候とくく安樂淨
土」に往生せさせおはしまして彌陀觀音を」師として法華の眞如實相平等の妙理
般」若の第一義空眞言の即身成佛一切の聖「五四・ウ」教心のまゝにさとらせおは
しますへし云」

●大胡太郎實秀へつかハす御返事 第十二

さきの便にハさしあふ事候て御返事こま」かに申さす候さきためて不審におほしめ
し」候らんと思給候さてハたつねおほせられ候し」事とも御文なんとなてたやすく申
ひらき」かたき事にて候あはれ京にひ」しく御逗留「五五・オ」候し時こまかに御沙
汰候ましかハよく候ひな」まし大方ハ念佛して往生すと申事ハかり」わつかにうけ給
ハリて候わか心」一つにふかく信し」たるハかりにてこそ候へとも人までつハひらか
に」申きかせなんとする程の身にて候はねハまし」てたちいりたる事とも不審なん
と御文」にて申ひらくへしともおほへ候はねともわ「五五・ウ」つかに見およひ候ハ
ん程の事をは、かりま」いらせてともかくも御返事申候ハさらん事の」おそれにて候
へハ心のおよふ程ハかたのことく申」候はんと存し候也」

まつ三心具足して往生すと申候事ハ「ま事」にその名目ハかりをうちきく時にハいかなる心」を申やらんと事しくおほへ□ひぬへけれ「五六・オ」とも善導の御心にてハ心えや□き事にて候也」かならずしもならひ沙汰せさらん無智の」人やさとりなからん女人なんと「え具せぬ程」の心はへにてハ候はぬ也た、まめやかに往生」せんとおもひて念佛申さん人ハ自然に具足」しぬへき心にて候物をそのゆへハ三心と申すハ觀無量壽經にとかれて候やうハもし「五六・ウ」衆生ありてかのくに、むまれんとねかは」んものハ三種の心をおこしてすなハち往生」すへし何等をか三とする一にハ至誠心二にハ」深心三にハ廻向發願心也この三心を具する」ものハかならずかのくに、むまると、かれた」りしかるに善導和尚の御心によらハはし」めに至誠心といふハ眞實の心也眞實といふ「五七・オ」はいはく内ハむなしくして外をかさる心」のなきを申也すなはち觀經疏に釋して」いはく外にハ賢善精進の相を現し内には」虚假をいたく事をえされといへりこの釋の」心ハ内ハおろかにして外にハかしこき人とお」もはれんとふるまひ内にハ惡をつくり外に」ハ善人のよしをしめし内にハ懈怠の心を」五七・ウ」懷きて外にハ精進の相を現するを眞實な」らぬ心とハ申也外も内もありのま、にてかさ」る心のなきを至誠心となつくるにこそ候」めれ」二に深心といふハすなハちこれ深く信する心也」何事をふかく信するそといふにまつ

疑心を除き決定
の心を勧む―善
導大師

弥陀の本願

もろく」の煩惱を具足しおほくのつみをつくりて「五八・オ」餘の善根なんとかならん凡夫あまたほとけの」大悲本願をあふきてそのほとけの大悲の名」號をとなへてもし八百年にてもし八四五十年にてもし八十二十年にても乃至一二年」にてもあれすへて往生せんとおもひはし」めたらん時よりして最後臨終の時にいた」るまで懈怠せしハ七日一日十聲一聲に「五八・ウ」てもおほくもすくなくも稱名念佛の人は」決定して往生すへしと信して乃至一念も」うたかふ心なきを深心とハ申也」しかるにもろく」の往生をねかふ人本願の名號をたもちなか」らなを内に妄念のおこるをおそれ外に餘善」のすくなきによりてもひとへにわか身をかる」しめて往生を不定におもハ、す□に本願を「五九・オ」うたかふ也されハ善導ハはるかに未來の行者」のこのうたかひをのこさん事をか、みてその」疑心をのそきて決定の心をす、めんかたために」煩惱を具足して罪業をつくり善根すく」なく智解なからん凡夫十聲一聲までの念」佛によりて決定して往生すへきことはり」をくハしく釋しおしへ給へる也たとひおほ「五九・ウ」くのほとけ空の中に充滿ちて光をはなち舌を」のへて造罪の凡夫念佛して往生すといふ事」ハひか事なり信すへからすとの給ふともそれ」によりて一念もおとろきうたかふ心あるへから」すそのゆへハ阿彌陀ほとけいたた佛になり給」ハさりしむかしもし我佛になりたらん」時十方の衆生わか名號を十

たひとなへ—こゑも「六〇・オ」となへむとなふる事か三百年よりしも十聲—一聲までにてせんにもしわかかくに、むまれすと「いは、われほとけにならしとちかひ給ひたり」しにその願むなしからすしてほとけになり「てすてにひきしくなり給へり知るへしそ」の名號をとなへむ人ハかならず往生すへしと「いふ事を又釋迦ほとけこの娑婆世界にて給「六〇・ウ」ひて一切衆生のためにかの彌陀の本願を」ときて念佛往生をす、め給へり又六方恆沙の諸佛おのく廣長の舌をいたして釋迦の念佛して往生すと、き給ふハ決定也もろくの衆生「ふかく信してすこしもうたかふ心あるへから」すと爾許のほとけたちの一佛ものこらす「味同心に證誠し給へりて□阿彌陀ほと「六一・オ」けハその願を立給ふ釋迦ほとけハその願のむ」なしからざる事をときす、め給ふ六方恆沙の諸佛ハその説の眞實なる事を證誠し給へりこのほかにいつれのほとけの又これら」の諸佛にたかひて凡夫念佛して往生せ」すとはの給ふへきそといふことハりをもておほくのほとけ現しての給ふともそれにおとろ「六一・ウ」きてきてハ念佛往生かなふましきかと信心をやふり疑心をおこすへからすいはんや菩薩」たちのの給ハんをやいはんや羅漢辟支等」をやと釋し給ひて候也いかにいはんや近來」の凡夫のいひさまたけんをやいかにめてたき」人と申すとも善導和尙にまさりたてまつりて往生の道をしりたらん事もありか「六一・オ」た

善導大師は弥陀
の化身

く候善導ハ又た、の凡夫にハあらずすなハ」ち阿彌陀佛の化身也かのほとけわか本願を」ひろめてあまねく一切衆生にしらしめて」決定して往生せさせん料にかりそめに」凡夫の人とむまれて善導和尚といはれ給ふ」也いはハその教ハ佛説にてこそ候へいかにいはん」や垂迹のかたにても現身に念佛三昧をえて「六二・ウ」まのあたり淨土の莊嚴を見佛にむかひたて」まつりてた、ちにほとけのおしへをうけ給は」りての給へる詞 共也本地をおもふにも垂迹」をたつぬるにもかた」あふいて信すへし」されハたれも」煩惱のこきうすきをかへり」みす罪障のかるきおもきをも沙汰せすた、」口に南無阿彌陀佛となへむ□□につきて「六三・オ」決定 往生のおもひをなすへしその決定の心」をやかて深心とハなつくる也その深心を具しぬ」れハ決定して往生する也詮するところハとにも」かくにも深心念佛して往生すといふ事をふ」かく信してうたかはぬを深心とはなつけて」候なり」

廻向發願心

三に廻向發願 心といふハこれ又別の心にハ候ハす「六三・ウ」わか所修の行業を一向に極樂に廻向して往生」をねかふ心也かくのとき三心を具してかな」らす往生すへしこの心 一つもかけぬれハ往生」せずと善導ハ釋し給へる也たとひ眞實の心ありてうゑをかさらすともほとけの本願をうたかハ、すてに深心かけたる念佛也」たとひ疑心なくともほかをかきりて内に「六四・オ」ま事の心なくハ至誠心かけた

三心の一も少
れば往生せず

る□なるへし」たとひこの二心を具してかざる心も疑心もなくとも」極樂にむまれ
んとおもふ心なくハ廻向發願」心かけぬへし三心を心えわかつ時にハかくの」ことく
別々なる様なれとも詮するところ」は眞實の心をおこしてふかく本願を」信して往
生をねかふ心を三心具足の心とハ「六四・ウ」申也大事にこれほどの心たにも具足せ
す」してハいか、往生ほどの大事をハとけ給ふ」へきやこの心ハ申せは又やすき事に
て候」也これをかやうに心えしらねハとて又え具」足せぬ心にてハ候はぬ也その名を
たにもし」らぬものもこの心をハそなへつへく候又よく」よくしりたらん人のなかに
もそのま、「六五・オ」に具せぬも候ひぬへき心はへにて候也され」ハこそいふに甲
斐なき人ならぬものとも」の中よりもた、ひらに念佛申すハかり」にて往生したりと
いふ事ハむかしより」申つたへたる事にて候へそれらハミなし」らねとも三心を具し
たる人にてあり」けりと心えらる、事にて候也又としころ「六五・ウ」念佛申たる
人の臨終のわろき事の候は」さきに申つるやうにうゑハかりをかきりてた」うとき念
佛者と人にいはれんととのミ思ひて」したにハふかく本願をも信せすまめやかに」往
生をもねかはぬ人にてこそハ候らめと」心えられ候也されハこの三心を具せざるゆ
へ」に臨終もわろく往生もせぬ事□て候也と「六六・オ」しろしめすへき也かく申候
へハ□□ハ往生」は大事の事にこそとおほしめす事ゆ」めく候ましき也一定往生

仏の來迎は臨終
正念のため

すへしと思ひ」とらぬ心をやかて深心かけて往生せぬ心とハ」申候へはいよく一
定の往生とこそおほしめ」すへき事にて候へまめやかに往生の心さし」ありて彌陀の
本願をうたかはすして「六六・ウ」念佛を申さん人ハ臨終のわろき事ハ大方ハ」候ま
しき也そのゆへハほとけの來迎し給ふ」事ハもとより行者の臨終正念のために
候」也それを心えぬ人ハミなわか臨終正念にて念」佛申たらん時にほとけハむかへ
給ふへき也」とのミ心えて候ハ佛の願をも信せず經の文をも」心えぬ人にて候也その
ゆへハ稱讚淨土經にいは「六七・オ」くほとけ慈悲をもて加へ助けて心をして」み
たらしめ給ハすと、かれて候へハた、の時に」よくく申をきたる念佛によりて臨終
にか」ならすほとけハ來迎し給ふへしほとけの來」迎し給ふを見たてまつりて行者
正念に住」すと申す義にて候也しかるにさきの念佛」をむなしくおもひなしてよし
なく臨終「六七・ウ」正念をのミいのる人なんと候ハゆ、しき僻」胤にいりたる
事にて候也されハほとけの本」願を信せん人ハかねて臨終をうたかふ心あ」るへから
すところおほへ候へた、當時申さん」念佛をはいよくも心を至して申へきにて」候
いつかハほとけの本願にも臨終の時念佛」申たらん人をのミ迎へんとハたて給ひて候
「六八・オ」臨終の念佛にて往生すと申事ハ日比往生」をもねかはす念佛をも申さす
してひと」えにつミをのミつくりたる惡人のすてに」死なんとする時はしめて善知識

のすゝめ」にあひて念佛して往生すところ觀經に「もとかれて候へもとよりの行者

ハ臨終の沙汰をハあなちにしすへき様ハ候ハぬ也佛の「六八・ウ」來迎一定ならハ

臨終の正念も又一定とおほしめすへき也この大意をもてよく御心を」と、め

て心えさせ給ふへく候又罪をつくりたる人たにも念佛して往生すまして法華經な

んとうちよみて念佛申さんハなに「かハくるしかるへきと人々の申候らん事は」京

邊にもさやうに申候人々おほく候へハまこ「六九・オ」とにさそ候らんそれハ餘宗

の心にてこそ候」らめよしあしをさため申すへきに候ハす」僻事と申さはおそれある

かたおほく候た、し淨土宗の心善導の御釋にハ往生の行に」大きにわかちて二つ

とす一にハ正行二にハ雜行也」はしめに正行といふハこれにあまたの行あり」は

しめに讀誦正行といふハこれハ無量壽經觀「六九・ウ」經阿彌陀經等の三部經

を讀誦する也つきに觀察正行といふハこれハかのくにの依正二報のありさま

を觀する也つきに禮拜正行といふハこれハ阿彌陀ほとけを禮拜する也つきに稱

名正行といふハ南無阿彌陀佛と、なふる也」つきに讚嘆供養正行といふハこれハ阿

彌陀佛」を讚嘆したてまつる也これをさして五「七〇・オ」種の正行となつく讚嘆と

供養とを二つの行」とする時ハ六種の正行とも申也この正行に付て「ふさねて二つと

す一にハ一心にもはら彌陀の名」號をとなへたてまつりて立居起臥晝夜に」わする、

諸善を交えるは
余宗の心

往生行―淨土宗
の心

五種正行

六種正行

事なく念々にすてざる物をこれを「正定の業となつくかのほとけの本願に順するか」ゆへにと申て念佛をもてまさしくきたため「七〇・ウ」たる往生の業と立て、もし禮誦等によるを「はなつけて助業とすと申て念佛のほかの」禮拜や讀誦や讚嘆供養などをハかの念「佛をたすくる業と申て候也さてこの正定業」と助業とをのそきてそのほかのもろくの業をハミな雜行となつく布施持戒忍辱精進等の六度萬行も法華經をもよみ眞言「七一・オ」をもおこなひかくのこくのもろくの行を「ハミなこ」とくく雜行となつくさきの正行を修するをハ專修の行者といひのちの雜行を修するをハ雜修の行者と申て候也この二行の得失を判するにさきの正行を修するにハ心つねにかのくに、親近して憶念ひまなしの」ちの雜行を行するにハ心つねに間斷す迴向「七一・ウ」してむまる、事をうへしといへともすへて疎」雜の行となつくといひて極樂にうとき行と「いへり又專修のもの八十人八十人なからむまれ」百人ハ百人なからむまるなにもてのゆへに」外の雜縁なくして正念をうるかゆへに彌陀の本願とあひ叶ふかゆへに釋迦のおしへにた」かはさるかゆへに雜行のものハ百人か中に「七二・オ」二人むまれ千人か中に四五人むまるなにもてのゆへに雜縁亂動して正念をうしな」ふかゆへに彌陀の本願と相應せさるかゆへに釋迦のおしへにしたかハさるかゆへに係念相續」せさるかゆへに憶念間斷するかゆへにみつ

善導和尚をふかく信じて浄土宗にいらん人

からも」往生の業をさへ他の往生をもさふるかゆへにな」んと釋せられて候めれハ善導和尚をふかく「七二・ウ」信して浄土宗にいらん人ハ一向に正行を修す」へしと申す事にてこそ候へそのうゑハ善導」のおしへをそむきて餘行をくわへんと思ハん」人ハおの／＼ならひたる様ともこそ候らめそれ」をよしあしとハいか、申候へき善導の御心に」てす、め給へる行ともをおきながらす、め給ハ」ぬ行をすこしにてもくわふへき様なしと申「七三・オ」事にてこそ候へす、め給へる正行はかりたに□」なを物うき身にていまたす、め給ハぬ雜行」を加えん事ハま事しからぬかたも候そかし」又つミをつくる人たにも念佛して往生すま」して善なれハ法華經などをよまんハなに」かくるしからんなんと申候らんこそ無下」にけきたなくおほへ候へ往生をたすけハこそ「七三・ウ」いミしくも候ハめさまたけにならぬハかりを」いミしき事とてくわへおこなはん事ハなに」かは詮にて候へきされハ惡をハ佛の心につく」れとやす、めさせ給ふかまへてと、めよとこ」そいましめ給へとも凡夫のならひ當時のま」よひにひかれて惡をつくるハちからおよは」ぬ事にてこそ候へま事に惡をつくる人の「七四・オ」様にしかるへくて經もよみたく餘行もくわへ」たからん事ハちからおよはすた、し法華」經などをよまん事を」と言ハなりとも惡を」つくらん事にいひならへてそれもくるしか」らねハましてこれハなんと申すらん事こそ」不便の事にて候

一定往生の正行
を修せ

へふかき御のりもあしく心こころ」うる人にあひぬれハ返りて物ならずきこへ「七四・ウ」
候事こそあさましくおほへ候へこれをかや」うに申候へハ餘行の人々ハ腹たつ事に
て候に「御心ごころ 一つに心こころえてひろくちらさせ給ましく」候あらぬさとの人のともか
くも申候ハん事」をハ耳みみにき、いれさせ給ハてた、一筋すぢに善導ぜんたう」の御す、めにしたか
ひていますこしも一定ちやうど」往生する念佛すへんの數遍すへんを申そえんとおほし「七五・オ」めすへ
き事にて候也たとひ往生のさわりとこ」そならずとも不定ふちやうの往生とハきこへて候めれ
ハ」一定ちやうど 往生しやうきやうの正行しやうきやうを修しゆすへき行きやうのいとまをいれて」不定ふちやうの往生わしやうの業ごうをくわへん事
ハ且かつうハ損そんにて」ハ候はすやよく々こころ心こころえさせ給ふへき事にて候」也た、しかく申候
へハ雜行さうきやうをくわへん人ハなかく」往生すましなんと申事にてハ候はすいか「七五・
ウ」さまにも餘行よきやうの人なりともすへて人をくたし」人をそしる事ハゆ、しきとかおも
き事にて候也よく々こころ御つ、しみ候て雜行さうきやうの人な」れハとてあなつる御心ごころの候まし
く候也よか」れあしかれ人のうゑのよしあしをおもひ」いれぬか吉よきき事にて候也又
心こころさし本もとより」この門もんにありて進すすみぬへからんをハこしらへ「七六・オ」す□めさせ
給ふへく候さとりたかひてあらぬ」さまならん人なんとに論ろんしあはせ給ふ事ハ」ある
ましき事にて候よく々こころならひしり」給ひたる聖ひしりりたちたにもさやうの事をは」つ、
しミておハしましあひて候そまして」殿原とのほらなんとおんみの御身ごんみにてハ一定ちやうど 儼事ひかごとにて候ハん

するに候た、御身おんみ一つにまつよくく往生わうじやうを「七六・ウ」ねかひて念佛ねんぶつをはけませ給ひて位くらたかき往わう」生なまをとけていそき娑婆しやばに返かへりて人ひとをハミ」ちひかせ給へかやうにくハしくかきつけて」申候事まうこうじも返くハ、かりおもふ事にて候也あ」なかしこく御披ごひ露候ろうこうましく候あなかしこく」

三月十四日

源空くゑんくう

黒谷くろたにのしやうにんご上人語燈録卷第十三

〔一・オ〕

黒谷上人語燈錄卷第十四

孫そん欣こん沙しゃ門もん了れう惠えい集しゅう録ろく

和語第二之四わごたいのし 當卷有たうくわんにあり二九篇くへん

●大胡太郎の妻室へつかハす御返事第十三

●熊谷の入道へつかハす御返事第十四

●津戸三郎へつかハす御返事第十五

●黒田の聖へつかハす御返事第十六

〔一・ウ〕

●越中の光明房へつかハす御返事第十七

●正如房へつかハす御文第十八

●禪勝房にしめす御詞第十九

●十二問答第二十

●十二箇條問答第二十一

おほこ
大胡の太郎實秀か妻室のもとへつかハす」御返事 第十三

「二・オ」

妻室への御返事

念仏は本願の行

彌陀の本願とは

御文こまかにうけ給ハリ候ぬまつはるかな」る程に念佛の事きこしめさんかために」
わさと御つかひあけさせ給ひて候念佛の御」心さしの程返くあはれに候さてたつ
ね」おほせられて候念佛の事ハ往生極樂の」ためにはいつれの行なりといへとも念
佛に」すきたる事ハ候はぬ也そのゆへハ念佛ハこ「二・ウ」れ彌陀の本願の行なるか
ゆへ也本願といふハ」阿彌陀ほとけいまたほとけになり給ハさり」しむかし法藏菩薩
と申し、いにしへほとけ」の國土をきよめ衆生を成就せんかために」世自在王如來
と申し、ほとけの御まえにして」四十八の大願をおこし給ひしその中に」一切衆生の
往生のために一つの願をおこし「三・オ」給へるこれを念佛往生の本願と申す也す
な」ハち無量壽經の上卷にいはいく設我得佛二十方」衆生至一心信樂欲生我國一乃
一至十念若不」生者不取正覺一已善導和尙この願を釋して」の給ハく
若我成佛十方衆生稱我名號一乃至十聲若不」生者不取正覺一彼佛今
現在世成」佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生一「三・ウ」已念佛
といふハ佛の法身を憶念するにもあ」らす佛の相好を觀念するにもあらずた、心」

念仏とは名号を
称念すること

浄土を願うもの
彌陀の誓願に従
うべし

このごろの人の
道は極樂往生す
とばかりなり
極樂往生には念
仏にあらざればか
ないがたし

をいたしてもハラ阿彌陀ほとけの名號ミヤウカウを稱念せうねんするこれを念佛とハ申也かるかゆへに稱我名しやうかミヤウ號かうとハいふ也念佛のほかの一切さいの行きやうハこれ彌陀の本願ほんくわんにあらざるかゆへにたとひめてたき行きやうなりといへとも念佛にハおよはざる也おほかた「四・オ」そのくに、むまれんとおもはんものハそのほとけのちかひにしたかふへき也されハ彌陀の淨土にむまれんとおもはん物ハ彌陀の誓願せいぐわんにし「たかふへき也本願ほんくわんの念佛ねんぶつと本願ほんくわんにあらざる餘よ」行きやうとさらにたくらふへからすかるかゆへに往わう生しやう極樂ごくらくのためにハ念佛ねんぶつの行きやうにすきたる事ことハ候はぬ也と申す也往生わんじやうにあらざる道みちにハ餘行よきやう「四・ウ」又おのゝつかさとれるかたありしかるに衆生しゆじやうの生死しんじをはなる、ミちほとけのおしへさまゝくに「おほく候へともこのころの人の三界さんがいをいて生死しんじ」をはなる、ミちハた、極樂ごくらくに往生わんじやうし候ハかり」也このむね聖教せいぎやうのおほきなることわり也次つぎ」に極樂ごくらくに往生わんじやうするにその行きやうさまゝくに「おほく」候へともわれらか往生わんじやうせん事念佛ねんぶつにあらす「五・オ」はかなひかたく候也そのゆへハ念佛ねんぶつハこれほとけの本願ほんくわんなるかゆへに願力がんりきにすかりて往生わんじやうする事ハやすしされハ詮せんするところハ極樂ごくらくに「あらすハ生死しんじをはなるへからす念佛ねんぶつにあらすハ」極樂ごくらくへむまるへからざる物也ふかくこのむね」を信しんさせ給たまはひて一すちに極樂ごくらくをねかひ一「すちに念佛ねんぶつしてこのたひかならず生死しんじを「五・ウ」はなれんとおほしめすへき也又一一の願ねんの」おはりに若不爾者不取正覺にがらばならぬとちかひ

彌陀の願はずで
に成就せり

本願に遇うこと
を喜ぶべし

光明徧照十方世
界念仏衆生撰取
不捨

給へり」しかるに阿彌陀ほとけ佛になり給ひてより」このかたすてに十劫をへ給へり
まさにしるへし」誓願むなしからすミなことくく成就し給へ」る也その中に念佛往生
の願ひとりむなしか」るへからすしかれハ衆生稱念する物一人もむ「六・オ」なしか
らすミかならず往生する事をう」もししからすハたれかほとけになり給へる」事を
信すへきや三寶滅盡の時なりといへとも」一念すれハなを往生す五逆重罪の人なりと
い」えとも十念すれハ又往生すいかにいはんや三寶」の世にむまれて五逆をつくらさ
るわれら」彌陀の名號をとえんに往生うたかふへから「六・ウ」すいまこの願にあ
へる事ハま事にこれおほ」ろけの縁にあらすよくくよろこひおほし」めすへしたと
ひ又あふといふとももし信せず」ハあはさるかことしいまふかくこの願を信」せさせ
給へり往生うたかひおほしめすへか」らすかならずくふた心なくよくく御念」佛
候ひてこのたひ生」死をはなれ極樂に「七・オ」むまれさせ給ふへし又觀」無量壽經
にいハく」一一光明徧照十方世界念仏衆生撰取不」捨已これハ彌陀の光明た、念
佛の衆生を」てらして餘の一切の行人をへてらさすといふ」也た、し餘の行をして
も極樂をねかハ」はほとけのひかりてらして攝取し給ふ」へしなんそた、念佛のもの
ハかりをえらひて「七・ウ」てらし給ふや善導和尚釋しての給ハく」彌陀身色如金
山相好光明照十方唯有念」佛蒙光攝當知本願最爲強上念佛ハこれ」彌陀の本願の

念仏は釈尊の付
属の行

行ぎやうなるかゆへに成しやう佛ふつの光くわう明みやう返かへりて本地ほんちの誓せい願くわんをてらし給たまふ也や餘よ行ぎやうハこれ本願ほんくわんに
あらさるかゆへに彌陀くわうみやうの光明くわうみやうきらひててらし給ハさる也いま極樂ごくらくをも「八・オ」
とめん人本願ほんくわんの念佛ぎやうを行きやうして攝取せつしゆのひかり」にてらされんとおほしめすへしこれにつ
け」ても念佛ぎやうの大切たいせうに候たいせうよくく申まをさせ給たまふへし」又釋迦しやか如來じよらいこの經きやうの中に定散ぢやうさんの
もろく「の」行ぎやうをときおはりてのちにまさしく阿難あなんに付嘱ふそくし給たま時ときにかみにとくとこ
ろの散善さんぜんの「三福業定善ふくごうぢやうせんの十三觀くわんをハ付嘱ふそくせずして「八・ウ」た、念佛ぎやうの一行ぎやうを付
嘱そくし給たまへり經きやうにい□く」佛告けつげい二阿難あなん二汝にち好持よな二是語てこのこを一持てこのこを一者いふハすなはちこれとなりむ即すなはち是持てこのこを二無な一
量りやう壽佛じゆふつ名な一已い上じやう善導ぜんたう和尚わしやうこの文もんを釋しやくしての」給たまハく從より二佛告ふつげい阿難あなん汝にち好持よな是語てこのこを一者いふハすなはちこれとなりむ即すなはち是持てこのこを二無な一
明下付めいげふ二嘱そく彌陀みやだ名號なごう一流中いちりゅう通つう於退代おのり上上じやうじやう來雖きたレ說せつ定散ぢやうさん兩門りゅうもん之益のえき一望いちぼう二佛本願ふつほんくわん
意い一在に二衆生じゆうじやう一を向かう專稱せんじゆん彌陀みやだ佛ぶつの名上なごう已いこれハ定散ぢやうさんのもろく「の」行ぎやうハ彌陀みやだの本ほん
願くわんに「九・オ」あらすかるかゆへに釋迦しやか如來じよらいの往生わうじやうの行ぎやうを付嘱ふそくし給たまふに餘よの定善ぢやうぜん
散善さんぜんをハ付嘱ふそくせず」して念佛ぎやうハこれ彌陀みやだの本願ほんくわんなるかゆへに「まさしくえらひて本願ほんくわん
の行ぎやうを付嘱ふそくし給たまへる也いま釋迦しやかのおしへにしたかひて往生わうじやう」をもとめん物付嘱ぶつそくの念
佛ぶつを修しゆして釋尊しやくそんの御心ごこころにかなふへしこれにつきても又よくく「九・ウ」御念佛ごぶつ
候たいせうてほどけの付嘱ふそくにかなハせ給たまふへし又六方恆沙むつぱうじやうさの諸佛しよぶつ舌したをのへて三千大さんぜんだい千世界せんしち
におほひてもはらた、彌陀みやだの名號なごう」をとなへて往生わうじやうすといふハこれ眞實しんじちなりと」證しやう

ひとえに善導に
よる

誠し給ふ也これ又念佛ハ彌陀の本願なるゆへに六方恆沙の諸佛これを證誠し給ふ也餘の行ハ本願にあらざるかゆへに諸「一〇・オ」佛も證誠し給ハざる也これにつけても又「よく御念佛せさせ給ひて六方の諸佛の」護念をかふらせ給ふへし彌陀の本願釋尊の付囑六方の護念一にむなしからすこのゆへに念佛の行ハ諸行にハすくれたる也」又善導和尚ハこれ彌陀の化身也淨土の祖師おほしといへともた、ひとへに善導によ「一〇・ウ」る往生の行おほしといへともおほきにわか」ちて二とし給へり一にハ專修いはゆる念佛也二にハ雜修いはゆる一切のもろくの行也上」にいふところの定散等これ也往生禮讚に云く「若能如上念一心相續畢命爲レ期二者十即生」百即百生何以故無二外雜緣一得二正念一故與二佛一本願一相一應一故不レ違二教一故隨二順佛一語一故若欲下捨二「一・オ」專一修中一雜業上者百時希得二二二千時希得二五三二」何を以故由二雜緣亂動一失二正念一故與二佛一本願一不二相一應一故與二教一相違一故不レ順二佛一語一故係一念不二相一續一故憶想間斷」故文これハ專修と雜行との得失なり得といふは往生する事をういはく」念佛するもの八十人ハすなはち十人なから」往生し百人ハすなはち百人なから往生「二・ウ」すといふこれ也失といふはいはく往生の益をう」しなへる也雜修のもの八百人中にまれに」一二人往生する事をえてその餘ハむまれす」千人か中にまれに

五三人むまれてその餘よハ」又むまれず専修せんしゆのもの、みみなむまる、事」をうるはなんのゆへそ阿彌陀ほとけの本ほん」願くわんに相應さうおうせるかゆへ也釋迦しやく如來にょらいのおしへに隨すい「一二・オ」順しゆんせるかゆへ也雜業さうごうのもの、むまる、事す」くなきハなんのゆへそ彌陀ミタの本願ほんくわんにたか」へるかゆへ也釋迦しやくのおしへにしたかはさるか」ゆへ也念佛にぶつして淨土じやうとをもとむるものハ二尊そん」の御心ごころにふかくかなへり雜さうを修しゆして淨土じやうとを」もとむるものハ二佛ふつの御心ごころにそむけり善ぜん」導和尙たうくわしやう二行にぎやうの得失とくしつを判はんせる事これのミに「二・ウ」あらず觀經くわんぎやうの疏しよと申まをすふミの中なかにおほくの」得失とくしつをあげたりしけきかゆへにいたさすこ」れをもてしりぬへしおよそこの念佛にぶつハ」そしる物ものハ地獄ちごくにおちて五劫ごこく苦くをうくる」事こときわまりなし信しんする物ものハ淨土じやうとにむま」れて永劫やうこく樂らくをうくる事こときわまりなし」なをくいよく信しん心をふかくしてふた心ごころなく「二三・オ」念佛にぶつせさせ給たまふへしくハしき事ハ御文ごもんにハ」つくしかたく候まをこの御ごつかひ申候まをへし」

正月廿八日 源空げんくう」

わたくしにいはくこの御文ハ正治元年己未御つかひハ」蓮上房尊覺なり」

●熊谷くまかへの入道にうたうへつかハす御返事 第十四

御文ごもんくハしくうけ給たまハリ候まをぬか様やうにまめやか」に大事たいしにおほしめし候まをらん返へんくあり

かた「二三・ウ」く候ま事にこのたひかまへて往生しなん」とおほしめしきるへく候

うけかたき人身」すてにうけたりあひかたき念佛往生の法」門にあひたり娑婆をいと

ふ心あり極樂を」ねかふ心おこりたり彌陀の本願ふかし往」生ハたなこ、ろにあるた

ひ也ゆめく御念」佛おこたらす決定往生のよしを存せさせ「二四・オ」給ふへく

候何事もと、め候ぬ」

九月十六日 源空

津戸の三郎入道へつかハす御返事 第十五

津戸三郎への返状

念仏は有智無智をきらわず

御文くハしくうけ給ハリ候ぬ又たつねおほ」せられて候事ともおほやうしるし申候」

一熊谷入道津戸三郎ハ無智のものなれハこ」そ但念佛をハす、めたれ有智の人にハ

かなら「二四・ウ」すしも念佛にハかきるへからすと申すよ」しきこへて候らんきわ

めたるひか事にて候」そのゆへハ念佛の行ハもとより有智無智にか」きらす彌陀のむ

かしちかひ給ひし本」願もあまねく一切衆生のため也無智のため」にハ念佛を願し有

智のためにハ餘のふかき」行を願し給ふ事なし十方衆生の句に「二五・オ」ひろく有

智無智有罪無罪善人悪人持戒」破戒賢」愚」男女もしハほとけの在世の衆生も」し

ハほとけの滅後のこのころの衆生もしハ釋」迦の末法萬年の、ち三寶ミなうせてのお

念仏を申しとど
むるもの

ハリ」の衆生しゆじやうまでもミなこもれる也又善導ぜんたう和尙わしやう彌陀みたの化身けしんとして専修せんしゆ念佛ねんぶつをす、め給へ」るもひろく一切衆生さいしゆじやうのためにす、めて無智むちの「二五・ウ」人にのミかきる事ハ候はすひろき彌陀みたの本願ほんくわん」をたのミあまねき善導ぜんたうのす、めをひろめん」物ものいかてか無智むちの人にかきりて有智うちの人をへ」たてんやもししからは彌陀みたの本願ほんくわんにもそむ」き善導ぜんたうの御心ごころにもかなふへからすされハこの」邊へんにまうてきて往生わうじやうのみちをとひたつね候」人ひとにハ有智うち無智むちを論ろんせずミな念佛ねんぶつの行ぎやうはか「二六・オ」りを申候也しかるに虚言ここんを構かまへえてさやうに念」佛を申と、めんとする物ハさきの世よに念佛ねんぶつ三昧まい」淨土じやうとの法門ほうもんをきかすのちの世よに又三惡道さんあくたうに」返かへるへきもの、さやうの事をハたくミ申候事」にて候也そのよし聖教しやうけうに見えて候也」

見レ有てハるお二修する事おこしんどくお一行起二禪禪毒一
如レ此のしやう生まうせんたいのともから盲闡提まうせんたいのともから輩輩
毀き二滅めつして頓とん教けうを一永ながく沈ちん沈りん論論
「二六・ウ」

超こ二過くわしてたいち大地微塵劫ミちんごちを一
未いまたへからレ可うる得はなる、事をレ離つのしんを二「三」途身つのしんを一

と申したる也この文もんの心こころは淨土じやうとをねかひ念」佛きやうぶつを行ぎやうする物ものを見てハいかりをおこし毒どく」心しんをふかくしてはかり事をめくらし様やう」様やうの方便ほうへんをなして念佛きやうぶつの行ぎやうをやふりあら」そひてあたをなしこれをと、めんとする也」かくのこときの人ハむまれてよりこ

虚言を信ぜず往
生を願う

結縁助成は念仏
の行を妨げざれ
ばよし

のかた佛「一七・オ」法の眼しるてほとけのたねをうしなへ」る闡提のともから也この彌陀の名號をとなへ」てなかき生死をたちまちにきり常住の極樂に往生すといふ頓教の御のりをそしりほ」ろほしてこのつミによりてなかく三惡道に」しつむといへる也かくのことくの人ハ大地微塵」劫をすくともなかく三惡道の身をはなる、「一七・ウ」事をうへからすといへる也されハさやうに虚言」をたくミて申候らん人ハ返りてあはれむへ」き物也さほともの、申さんによりて念佛に」うたかひをなし不審をおこさん物ハいふに」たらぬ程の事にてこそハ候はめおほかた」彌陀に縁あさく往生に時いたらぬ物ハきけ」とも信せずおこなふを見てハはらをたていか「一八・オ」りをふくミてきまたけんとする事にて候なり」その心をえていかに人申すとも御心ハかりハゆる」かせ給ふへからすあなちち信せさらんハ佛な」をちからおよひ給ふましいかにいはんや凡」夫ハちからおよふましき事也かゝる不信の」衆生のために慈悲をおこし利益せんと思はん」につけてもとく極樂へまいりてきとりを「一八・ウ」ひらきて生死に返りて誹謗不信の物をも」わたし一切衆生をあまねく利益せんと思ふ」へき事にて候也このよしを心えておハしま」すへし」

一一家の人々の善願に結縁助成せん事この」條左右におよはすもともしかるへき事」候念佛の行をさまたくる事をこそ専修「一九・オ」の行にハ制したる事にて候へ

念仏の行は行住
坐臥時処諸縁を
きらわす

人々のあるいは「堂をつくりほとけをつくり經をもかき僧をも」供養せんにハちか
らをくハへ縁をむすはんか念「佛をさまたけ専修をさうるほどの事にハ」候ましきな
り」

一念佛申させ給はんにハ心をつねにかけて口にわすれすとなふるかめてたき事にて
候也「一九・ウ」念佛の行ハもとより行住坐臥時處諸縁を「きはぬ行にて候へハ
たとひ身もきたなく口もきたなくとも心をきよくしてわすれ」す申させ給ハん事ハ
返々神妙に候ひまなくさやうに申させ給ハんこそ返々あり」かたくめてたく
候へいかならんところいかなる」時なりともわすれす申させ給ハ、往生の「二〇・
オ」業にかならずなり候ハんする也この心なからん人にハおしへさせ給ふへしいか
ならん時」にも申されらんをこそねうして申さは」やとおもふへきに申されんをね
うして申さ」せ給ハぬ事ハいかてか候へきゆめく候まし」た、いかなるおりにもき
らはす申させ給」ふへし

「二〇・ウ」

一念佛の行あなちち信せさらん人に論し」あひ又あらぬ行ことさとの人にむかひ
て」いたくしみておほせらる、事候ましく候異解異學の人を見てハこれを恭敬し
て」かろしめあなつる事なかれと申たる」事にて候也されハおなし心に極樂をね」か

念仏不信のもの
と論じあうべか
らず

念仏の心、金剛
よりもかたくす

ひ念佛を申さん人にハたとひ塵刹ちんせつのほ「二一・オ」かの人なりとも同行どうぎょうのおもひをなして一」佛淨ぶつじやうと土にむまれんとおもふへき事にて候也」阿彌陀佛あみだぶつに縁えんなく極樂淨土ごくらくじやうとにちきり」すくなく候はん人の信しんもおこらすねかハ」しくもなく候ハんにハちからおよはす」た、心こころにまかせていかならんおこなひをも」して後生ごじやうたすかりて三惡道まくだうをはなるへ「二一・ウ」き事を人の心にしたかひてす、め給ふ」へき也又さハ候へともちりハかりもかなひぬへ」からんにハ阿彌陀ほとけをす、め極樂を」ねかはすへき也いかに申すともこの世の人の」極樂にむまれて生じやうし死しをはなれん事念佛」ならて極樂にむまる、事ハ候ましき」事にて候也このあひたの事をハ人の心に「二一・オ」したかひてはからふへきにて候也いかさま」にも物をあらそふ事ハゆめく候ましき事」に候もしハそしりもしハ信しんせさらん物をハ」ひさしく地獄ちごくにありて又地獄ちごくへ返かへるへき物な」りとよくく心こころえてこわからてこしらへす、」むへきにて候又よもとおもひまいらせ候へとも」いかなる人申すとも念佛の御心ごこころなんとたちろき「二一・ウ」おほしめす事あるましく候たとひ千佛せんぶつ」世よにいて、念佛ハ往生すへからすとまのあた」りおしへさせ給ふともこれハ釋迦彌陀しやかみたより」はしめて恆沙ごうしゃのほとけの證しやう誠じやうせさせ給」ふ事なれハとおほしめして心こころさしを」金剛こんかうよりもかたくしてこのたひかならす」阿彌陀ほとけの御まえへまいらんとおほ「二三・オ」しめすへきにて候也かくのこときの

事かた」はしを申さんに御心え候てわかため人のた」めにおこなはせ給ふへし」

九月十八日

眞勸承

一紙小消息

四つの疑うべからざること

●黒田の聖人へつかハす御文 第十六

所求・所帰・去行

深信
五難
撰取門と抑止門
一罪人なお生まる、いかに況や
善人をや

末代の衆生を往生極樂の機にあて、見るに」行すくなしとてうたかふへからす一念十「二三・ウ」念にたりぬへし罪人なりとてうたかふへからす罪根ふかきをもきはす時くたれりと」てうたかふへからす法滅已後の衆生なを」往生すへしいはんやこのころをやわか身わ」ろしとてうたかふへからす自身はこれ煩」惱具足せる凡夫なりといへり十方に淨土お」ほけれとも西方をねかふ八十悪五逆の衆「二四・オ」生もむまる、ゆへ也諸佛の中に彌陀に歸し」たてまつるハ三念五念にいたるまでみつからき」たりてむかへ給ふかゆへ也諸行の中に念佛を」もちゐるハかのほとけの本願なるかゆへ也いま」彌陀の本願に乗して往生してんにハ願と」して成せすといふ事あるへからす本願に」乗する事ハた、信心のふかきによるへし「二四・ウ」うけかたき人身をうけてあひかたき本願に」あひておこしかたき道心をおこしてはなれ」かたき輪廻のさとをはなれてむまれかたき」淨土に往生せん事ハよろこひかなかのよろこひ也つみを八十悪五逆のものなをむまる」と信して小罪をもおかさしとおもふへし」

彌陀の本願・釈迦の付属・諸仏の証誠

本迹一致

一念義は言語道断のこと

乃至一念とは、上尽一形下至十声一声等の念仏

罪人なをむまるいかにいはんや善人をや行「二五・オ」ハ一念十念むなしからすと信して無間に「修すへし一念なをむまるいかにいはんや多」念をや阿彌陀ハ不取正覺の詞成 就して現」にかのくに、ましませハさためていのちおは」らん時にハ來迎し給はんすらん釋尊は「よきかなやわかおしへにしたかひて生死」をはなれんとすと知見し給ふらん六方諸佛「二五・ウ」ハよろこハしきかなわれらか證誠を信して「不退の淨土に往生せんとすとよろこひ給ふ」らんと天にあふき地にふしてもよろこひつ、「このたひ彌陀の本願にあへる事を 行住坐臥」にも報すへしかのほとけの恩徳をたのミて」もなをたのむへきハ乃至十念の詞 信して」もなを信すへきハ必得往生の文なり

「二六・オ」

●越中國光明房へつかハす御返事 第十七

一念往生の義は京中にもほ、流布するよし」うけ給はるところ也およそ言語道断の事也」ま事にほと御問にもおよふへからさる事」歎雙卷 經の中にハ乃至一念信心歡喜といひ」又善導和尚の疏にハ上一形を盡し十聲」一聲にいたるまでもさためて往生する事「二六・ウ」をうと信して乃至一念もうたかふ心なかれ」といへるこれらの文をあしく料簡すると」もからのか、る大邪見に住して申候ところ也乃至と

いひ下至といへるは上ミ一形をつくすをかねたる詞也しかるをこのころの愚癡
 無智のともからのおほくひとえに十念一念なりと執して上盡一形をすつる條「二
 七・オ」無慚無愧の事也ま事に十念一念までも「ほとけの大悲本願なをかならず引攝
 し」給ふ無上の功德なりと信して一期不退に「行すへき也文證おほしといへともこれ
 を出」すにおよはず不足言の事也こゝにかの邪見の人の難をうけて答へていはく
 わかいふとこ「ろも信を一念にとりて念すへき也しかりと」「二七・ウ」いひて又念佛
 すへからすとはいはすと云 ことハ「は尋常なるにたれとも心ハ邪見をはなれ」す
 しかるゆへハ決定の信心をもて一念して「のちハ又念すといふも十惡五逆なをさわり
 を」なさすいはんや餘の小罪をやと信すへき也」といふこのおもひに住せん物ハたと
 ひ多念す」といふともあにほとけの御心かなはんやいつ「二八・オ」れの經論の
 いかなる説そやこれひとへに懈怠無道心のいたり不當不善のたくひのほしき」ま、
 に惡をつくらんとおもひていふ事なり」又念すハその惡かの勝因をさへてむしろ
 三途におちさらんやかの一生造惡のもの、臨終に十念して往生するハこれ懺悔
 念佛の「ちから也この惡義にハ混亂すへからすかれハ「二八・ウ」懺悔の人也これハ
 邪見の人もなをく不可説の事也たとひ精進のものなりといふともこの「義をき
 かはかならず懈怠になりなんまれに」持戒の人ありといふともこの説を信せはすな」

はち無慚むざんになりぬへしおよそかくのこと」きの人ハ附佛法ふつぽうの外道也げだう師子ししの中のむし也」又うたかふらくハ天魔てんま□旬しゆのためにその正しやう「二九・オ」解けをうハ、れたるともからのもろくの往生わうしやうの「人をさまたけんとするかもともあやしむ」へしふかくおそるへしことく筆端ひつたんにつく」しかたしあなかしこく」

・正しやう如房じよほうへつかハす御文ごぶん 第十八

正しやう如房じよほうの御事ごんこそ返かへすくあさましく候へ」その、ちハ心こころならすうときやうになりまいらせ「二九・ウ」て念佛ごんの御信ごしんもいか、とゆかしくおもひま」いらせ候つれともさしたる事も候はす又申」すへきたよりも候はぬやうにて思なからなに」となくむなしくまかりすき候つるにた、れい」ならぬ御事ごん大事たいじになんとはかりうけ給ハリ候」はんににもいま一度見いちどまいらせたくおハリま」ての御念佛ごんの事もおほつかなくこそおもひ「三〇・オ」まいらせ候へきにまして御心ごんにかけてつねに」御たつね候らんこそま事にあはれにも心こころく」るしくもおもひまいらせ候へ左右さうなくうけ給」ハリ候ま、にまいり候て見まいらせたく候へとも」思ひきりてしハしるてありき候はて念佛ごん申候ハ、やと思ひハしめたる事の候を様やうにこ」そよる事にて候へこれをハ退たいしてもまいるへ「三〇・ウ」きにて候に又思ひ候へハ詮せんしてハこの世よの見參けんざん」とてもかくても候なん

往生は我が身の
善し悪しによら
ず

下品上生の滅罪
往生

屍かはねねを執しじするまとひに」もなり候ひぬへしたれとてもとまりはつへ」き身にも候はず
われも人もた、おくれさき」たつかわりめハかりにてこそ候へそのたえまを」思ひ候
も又いつまでそときためなきうへに」たとひ久ひさししと申候ともゆ□まほろしいく程ほど
「三二・オ」かハ候へきなれハた、かまえてくおなし佛ぼつの」國くににまいるあひてはち
すの上うへにてこの世よのい」ふせきをもはるけとも過去くわこの因縁いんえんをもかた」りたかひに未
來らいの化道けだうをもたすけん事こ」そ返くも詮せんにて候へきとはしめよりも申」おき候しか
返くも本願ほんがんをとりつめまいらせ」て一念ねんもうたかふ御心ごころなく十聲じしやうも南無阿彌
「三二・ウ」陀佛と申せはわか身ハたとひいかに罪つみふかく」ともほとけの願力くわんりきにより
て一定ちやうじつしやう往生わうじやうするそと」おほしめしてよくく一すちに念佛ねんぶつの候へ」き也われらか往
生ハゆめくわか身のよしあ」しきにハより候ましひとへにほとけの御ち」からハか
りにて候へき也わかちからハかりにてハ」いかにめてたく貴たときとき人□申すとも末法まつぽうの
「三二・オ」このころた、ちに淨土じやうどにむまる、程ほどの事ハあり」かたくそ候へき又佛ぼつの
御ちからにて候ハんにハ」いかに罪つみふかくおろかにつたなき身なりとも」それにハよ
り候ました、佛ぼつの願力くわんりきを信しん」信しんせざるにそより候へきされハ觀くわん無量壽經むりやうじゆきやう」にと
かれて候ハむまれてよりこのかた念佛」一遍へんも申さすそれならぬ善根ぜんこんもつやく
「三二・ウ」なくてあさゆふものころしぬすミしかくの」こときのもろくくのつミを

のミつくりてとし」月をゆけとも一念も懺悔の心もなくてあか」しくらしたるもの、おハりの時に善知識の「す、むるにあひてた、一聲南無阿彌陀佛」と申したるによりて五十億劫かあひた生」死にめくるへき罪を滅して化佛菩薩三尊「三三・オ」の來迎にあつかりて佛の名をとなふるかゆ」えに罪滅せりわれきたりてなんちをむか」ふとほめられまいらせてすなハちかの國に」往生すと候又五逆罪と申て現身に父をころし母をころし惡心をもて佛をころし」諸宗を破しかくのことくおもきつミをつくりて一念懺悔の心もなからんそのつミに「三三・ウ」よりて無間地獄におちておほくの劫をおくりて苦をうくへからん物おハりの時に善知識のす、めによりて南無阿彌陀佛と十」聲となふるに一聲におのく八十億劫かあ」ひた生死にめくるへき罪を滅して往生すと、かれて候めれハさほとこの罪人たにもた、十」聲一聲の念佛にて往生ハし候へま事に「三四・オ」佛の本願のちからならてハいかてかさる事」候へきとおほへ候本願むなしからすといふ事」ハこれにても信しつへくこそ候へこれハまさ」しき佛説にて候佛の御言ハ、一言もあやま」らすと申候へハた、あふきても信すへきにて」候これをうたかハ、佛の御そら事と申す」にもなりぬへく候返りてハ又そのつミも候「三四・ウ」ひぬへしとこそおほへ候へふかく信せさせ給」ふへく候さて往生せさせおハしますまし」き様にのミ申きかせまいらする人くの候」らんこ

念仏を退転させ
る悪知識

彌陀の本願

釈迦の説法

諸仏の証誠

そ返くあさましく心くるしく候へ」いかなる智者めてたき人くおほせらるとも」
それになおとろかせおハしまし候そおのく」のみちにハめてたく貴き人なりとも
さと「三五・オ」りあらす行ことなる人の申候事ハ往生」淨土のためにハ中く
ゆ、しき退縁悪知」識とも申ぬへき事ともにて候た、凡夫のはからひをハき、いれ
させおハしま」さて一すちに佛の御ちかひをたのミまい」らせおハしますへく候さと
りことなる」人の往生いひさままたけんによりて一念も「三五・ウ」うたかふ心あるへ
からすといふことハリハ善導」和尚のよくくこまかにおほせられおきた」る事にて
候也たとひおほくのほとけそらの」中にミちくくてひかりをはなちしたをのへ」て悪
をつくりたる凡夫なりとも一念し」てかならず往生すといふ事ハひか事そ」信すへか
らすとの給ふともそれによりて「三六・オ」一念もうたかふ心あるへからすそのゆへ
ハ阿」彌陀佛のいまた佛になり給ハさりしむ」かしはしめて道心をおこし給ひし」時
われほとけになりたらんにわか名をと」なふる事十聲一聲までせん物わかく」に、
むまれすはわれほとけにならしと」ちかひ給ひたりしその願むなしから「三六・ウ」
すすてに佛になり給へり又釋迦佛この」娑婆世界において、一切衆生のためにかの
本」願をとき念佛往生をす、め給へり又六方」恆沙の諸佛この念佛して一定往生す
と」釋迦佛のとき給へるハ決定也もろくの衆」生一念もうたかふへからすこと

善導和尚に勝りて往生の道を知りたらんこともかたくそうろう

「くく一佛も」のこらすあらゆる諸佛ミなことく證誠「三七・オ」し給へりすてに阿彌陀佛ハ願にたて釋迦佛ハその願をとき六方諸佛ハその説を證誠し給へるうゑこのほかハなにほとけの」又これらの諸佛にたかひて凡夫往生せず」とハの給ふへきそといふことハりをもて佛現し」ての給ふともそれにおとろきて信心をやぶりうたかふ心あるへからすいはんや菩薩たち「三七・ウ」の給ハんをや又辟支佛をやとこまくと善導ハ釋し給ひて候也ましてこのころの」凡夫のいかに申候はんによりてけにいか、あ」らんすらんなんと不定におほしめす御心」ゆめく候ましく候いかにめてたき人と申」すとも善導和尚にまさりて往生の道を」しりたらん事もかたく候善導又凡夫「三八・オ」にあらす阿彌陀佛の化身也阿彌陀佛のわか」本願ひろく衆生に往生せさせん料にかりに」人とむまれて善導とハ申候也そのおしへハ」申せハ佛説にてこそ候へあなかしこくう」たかひおほしめすましきにて候又はし」めより佛の本願に信をおこさせおハしま」して候し御心の程見まいらせ候になにし「三八・ウ」にかハ往生ハうたかひおほしめし候へき」經にとかれて候ことくいまた往生の道もし」らぬ人にとりての事にて候もとよりよく」きこしめした、めてそのうゑ御念佛功」つもりたる事にて候はんにハかならず又臨終の善知識にあはせおハしまさすとも往」生ハ一定せさせおハしますへき事にてこ」「三九・オ」そ候へ中

臨終には佛を善知識にいたむべし

来迎と臨終正念

念仏申すは我が身一つのためのみならず

く「あらぬさまなる人ハあしく候」なんだ、いかならん人にてても尼女房なりとも「つねに御まへに候はん人に念佛申させてき」かせおハしまして御心一つをつよくおほし」めしてた、中く一向に凡夫の善知識をお」ほしめしして、佛を善知識にたのミまい」らせさせ給ふへく候もとよりほとけの來迎「三九・ウ」ハ臨終正念のためにて候也それを人のミな」臨終正念にて念佛申たるに佛ハむかへ給ふ」とのミ心えて候ハ佛の願を信せず經の文を信」せぬにて候也稱讚淨土經にハ慈悲をもてく」わへたすけて心をして見たらしめ給ハ」すと、かれて候也た、の時によくく申をき」たる念佛によりて佛ハ來迎し給ふ時に正「四〇・オ」念にハ住すと申すへきにて候也たれも佛を」たのむ心ハすくなくしてよしなき凡夫の」善知識をたのミさきの念佛をハむなしく」おもひなして臨終正念をのミいのる事とも」にて候かゆ、しきひかるんの事にて候也これ」をよくく御心えてつねに御目をふさき掌」をあはせて御心をしつめておほしめすへ「四〇・ウ」く候ねかはくハ阿彌陀佛本願あやまたす」臨終の時かならずわかまへに現して慈悲」をもてくわへたすけて正念に住せしめ給」へと御心にもおほしめして口にも申させ」給ふへく候これにすぎたる事候まし心よ」はくおほしめす事の候ましき也か様に」念佛をかきこもりて申候はんなんとおもひ「四・オ」候もひとへにわか身一つのためとのミハもとより」おもひ候はすおりし

もこの御事をかくうけ給はり候ぬれハいまよりハ一念ものこさす」ことくその往生の御たすけになさんとこそ」廻向しまいらせ候はんすれハかまへてくおほしめすさまに遂させまいらせ候ハ、やと」こそハふかく念しまいらせ候へもしこの心さ「四一・ウ」しま事ならはいかてか又御たすけにもな」らて候へきたのミおほしめさるへきにて候」おほかたハ申いて候し一ことはに御心をと、「めさせおハします事もこの世一つの事」にて候ハしとききの世もゆかしくあはれ」にこそおもひしらる、事にて候へハうけ給」はる事ハこのたひま事にさきた、せおハし「四二・オ」ますにて又おもはずにさきたちまいらせ」候事になるさためなさにて候ともつるに」一佛浄土にまいりあひまいらせ候はんハうた」かひなくおほへ候ゆめまほろしのこの世」にていま一度なんとおもひ申候事ハとても」かくても候ひなんこれをハ一すちにおほしめ」しすて、いと、もふかくねかふ御心をもまし「四二・ウ」念佛をもはけましおハしましてかし」こにてまたんとおほしめすへく候返くも」なをく往生をうたかふ御心候ましく候五逆」十悪のおもき罪つくりたる悪人なを十聲」一聲の念佛によりて往生をし候はんに」まして罪つくらせおハします御事ハ何」事か候へきたとひ候へきにてもいく程の事「四三・オ」かは候へきこの經にとかれて候罪人にハいひくらふへくやハ候それにまつ心をおこし出」家をとけさせおハしましてめでたき御の」

りにも縁をむすひ時にしたかひ日にし」たかひて善根のミこそ八つもらせおハし」ま
す事にて候らめそのうゑふかく決定往」生の法文を信して一向專修の念佛にいり
「四三・ウ」て一すちに彌陀の本願をたのミてひさしく」ならせおハしまして候何事
にかハ一事」も往生をうたかひおほしめし候へき專」修の人八百人八百人ながら十
人八十人ながら」往生すと善導ハの給ひて候へハひとりその」かすにもれさせおハし
ますへきかはとこそ」おほへ候へ善導をもかこち佛の本願をも「四四・オ」せめまい
らせさせ給ふへく候心よはくハゆめく」おほしめすましく候あなかしこくことハ
り」をや申ひらき候とおもひ候程によにおほく」なり候ひぬるさやうのおりふし骨な
くや」とおほへ候へとももしきすかのひたる御事に」ても又候らんえしり候はねハこ
のたひ申候ハ」てハいつをかまち候へきものとかにきかせ「四四・ウ」おハしまし
て一念も御心をす、むるたより」にやなり候とおもひ候はかりにと、めえ候ハ」てこれ
ほとこまかになり候ぬ機嫌をし」り候はねハはからひかたくてわひしくこそ」候へも
し無下によはくならせおハしまし」たる御事にて候ハ、これハ事なかく候へく候」要
をとりてつたへまいらせさせおハします「四五・オ」へく候うけ給ハリ候ま、になに
となくあハれに」おほへ候てお返し又申候也」

● 禪勝房にしめす御詞 第十九

十念は十度生まれる功德

念仏は生まれつきのままにて申す

信をば一念に生まるととり行をば一形励むべし念仏は念々ごとく往生の業となる

阿彌陀佛は一念となふるに一度の往生にあてかひておこし給へる本願也かるかゆへに十念八十度むまる、功德也一向専修の念佛者になる日よりして臨終の時にいたるまで「四五・ウ」申たる一期の念佛をとりあつめて一度の往生ハかならすする事也

又云念佛申す機ハ生まれつきのまゝにて申す也さきの世のしわざによりて今生の身をハうけたる事なれハこの世にてハえなをしあらためぬ事也たとへハ女人の男子に「ならはやとおもへとも今生のうちにハ男子と「四六・オ」ならざるかことし智者ハ智者にて申し「愚者ハ愚者にて申し慈悲者ハ慈悲あり」て申し邪見者ハ邪見ながら申す一切の人」ミなかくのことしされハこそ阿彌陀ほとけ」ハ十方衆生とてひろく願をハおこしてましませ」

又云一念十念にて往生すといへハとて念佛を「四六・ウ」疎相に申せハ信力か行をさまたくる也念念不捨といへハとて一念十念を不定におもへハ行か信をさまたくる也かるかゆへに信をハ一念にむまるととり行をハ一形はけむべし

又云一念を不定におもふものハ念念の念佛ことに不信の念佛になる也そのゆへハ阿

彌陀」佛ハ一念に一度の往生をあておき給へる願「四七・オ」なれハ念念ことに往生の業となる也」

●十二の問答 第二十

一、浄土宗について
の問答

問曰 八宗九宗のほか
に浄土宗をたつる事自
由の條かなと餘宗の人の申候をはいか
んか申し候へき」

答宗の名をたつる事ハ佛の説にあらすみ」つから心さすところの經教につきておし
ふる「四七・ウ」義をさとりきわめて宗の名をハ判する事也諸宗の習ミなもてかく
のことしいま浄土宗の名をたつる事ハ浄土の正依經につきて」往生極樂の義を
さとりきわめておハします」先達の宗の名をハたて給へる也宗のおこりを」しらざる
もの、左様の事をハ申候也」

二、雑行について
の問答

問曰 法華眞言等をハ雑行にハいるへからす「四八・オ」と人人の申候をはいか、こ
たへ候へき」

答恵心先徳一代聖教の要文をあつめて」往生要集をつくり給へる中に十門をたつ
そ」の第九の往生諸業門に法華眞言等の諸大乘經をいれ給へり諸行と雑行と言
異にして」心おなしいまの難者ハ恵心の先徳にまさる」へからざるもの也

三、結縁助成に
ついでの間答

「四八・ウ」問曰 餘佛餘經につきて善根を修せん人に結縁助成し候はん事ハ雜行と申候へきか」

答わか心 彌陀ほとけの本願に乘し決定 往生の信をとるうゑにハ他の善根に結縁助成せん事ハまたく雜行になるへからすわか往生の助業となるへき也他の善根を隨喜讚嘆せよと釋し給へるをもて心うへき事也

「四九・オ」

問曰極樂に九品の差別の候事ハ阿彌陀ほとけのかまへさせ給へる事にて候やらん」
答極樂の九品ハ彌陀の本願にあらす四十八願の中にもなしこれハ釋尊の巧言也
善人 惡人一所にむまるといハ、惡業のものとも慢心をおこすへきかゆへに九品の差別をあらせて善人ハ上品にす、み惡人ハ下品にくたると「四九・ウ」とき給へる也いそきまいりて見るへし」

五、持戒・破戒
と念仏について
の間答

問曰持戒の行者の念佛の數遍のすくなく候候はんと破戒の行人の念佛の數遍のおほく候候はんと往生の、ちの位の淺深いつれかす、み候へきや」

答居てまします疊をおさへての給ハくこの疊のあるにとりてこそやふれたるかやふれ「五〇・オ」さるかといふ事ハあれつやく、なからんた、ミをハなにとか論すへき末法の中にハ持戒もなく破戒もなした、名字の比丘ハかりあり」と傳教大師の

六、高唱念仏に
ついでの間答

末法燈明 記にかき給へるうゑにハなにと持戒破戒の沙汰をハすへきそか、一るひ
ら凡夫のためにおこし給へる本願なれ」はとていそきく名號を稱すへし

「五〇・ウ」

問曰念佛の行者等日別の所作においてこゑをたて、申す人も候又心に念してかす
をと」る人も候いつれかよく候へき」

答それハ口にてとなふるも名號心にて念するも名號なれハいつれも往生の業と
は」なるへした、し佛の本願ハ稱名の願なる」かゆへに聲をたて、となふへき也こ
のゆへに「五一・オ」經にハ令聲不絶具足十念と、き釋にハ稱我」名號下至十
聲との給へり耳にきこゆる程」ハ高聲念佛にとる也されハとて機嫌をし」らす高聲
なるへきにハあらず地體ハ聲」を出さんとおもふへき也」

問曰日別の念佛の數遍相續に在る程ハい」かんかはからひ候へき

「五一・ウ」

答善導の御釋によるに一萬已上ハ相續に」て候へした、し一萬遍をいそき申して」
さてその日をくらさん事ハあるへからす」一萬遍なりとも一日一夜の所作とすへき
也」惣してハ一食のあひたに三度はかり思ひ」いたさんハよき相續にてあるへしそれ
ハ」衆生の根性不同なれハ一準なるへからす心」[五一・オ]さしたにふかけれハ自

七、念仏相續に
ついでの間答

然に相續ハせらるゝ也」

八、信と行との
關係についての
問答

問曰禮讚の深心の中に八十聲一聲必得往生乃至一念無有疑心と釋し給へり又疏の深心の中にハ念念不捨者是名正定之業と釋し給へりいづれかわか分にハおもひきため候へき」

答十聲一聲の釋ハ念佛を信する様念念不捨者の釋ハ念佛を行する様也かるかゆへに「五二・ウ」信をハ一念にむまると、りて行をハ一形に」はけむへしとす、め給へる釋也又大意ハ「一發心已後誓畢此生無レ有ニレ退轉一唯以ニ淨土」爲レ期の釋を本とすへき也」

九、一念につい
ての問答

問曰本願の一念ハ尋常の機にも臨終の機にもともに通し候へきか」

答一念の願ハいのちつ、まりて二念におよ「五三・オ」はざる機のため也尋常の機に通すへくハ上盡一形の釋あるへからすこの釋をもて心うるにかならずしも一念を本願といふへからす念念不捨者は名正定之業順彼佛願故と釋し給へりこの釋ハ數遍つもらんも本願とハきこへたるハた、本願にあふ機の遲速不同なれハ上盡一形下至一念とおこし「五三・ウ」給へる本願也と心うへき也かるかゆへに念佛往生の願とこそ善導ハ釋し給へ」

一〇、自力・他
力についての問
答

問曰自力他力の事ハいかんか心え候へき」

答源空ハ殿上へまいるへき器量にてハなけれ」とも上よりめせは二度までまいりたり
きこ」れハわかまいるへきしなにてハなけれとも上」の御ちから也まして阿彌陀ほと
けの御「五四・オ」ちからにて稱名の願にこたへて來迎せき」せ給ハん事ハなんの
不審かあるへきわか身」つミおもくて無智なれハ佛もいかにして」かすくひ給ハん
んとおもはん物ハつやく」佛の願をもしらざる物也か、る罪人とも」をやすくと
たすけすくはん料におこし」給へる本願の名號をとなへなからちり「五四・ウ」は
かりもつたかふ心かあるましき也十方」衆生の中は有智無智有罪無罪善」人
惡人持戒破戒男子女人三寶滅盡の、」ちの百歲までの衆生ミなこもる也かの三寶」
滅盡の時の念佛者と當時の御房達とく」らふれハ當時の御房達は佛のことしか」の時
の人のいのちハた、十歲也戒定慧の三「五五・オ」學た、名をたにもきかす物して
いふハか」りなき物とも來迎にあつかるへき道理を」しりなからわか身のすてられ
まいらすへ」き様をハいかにしてか案し出すへき」た、極樂のねかハしくもなく念佛
の」申されさらん事のミこそ往生のさわり」にてハあるへけれかるかゆへに他力本
願とも「五五・ウ」いひ超世の悲願ともいふ也」

問曰至誠等の三心を具し候へき様をハいかん」かおもひさため候へき」

答三心を具する事ハた、別の様なし阿彌一陀ほとけの本願にわか名號を稱念せハか

一一、三心の具
し方についての
問答

な」らす來迎せんとおほせられたれハ決定し」て引接せられまいらせんするそとふかく「五六・オ」信して心に念し口に稱するに物うからす」すてに往生したる心ちして最後一念」にいたるまでたゆまさるものハ自然に三心」ハ具足する也又在家の物ともハこれ程まで」おもはされともた、念佛申す物ハ極樂に」むまるなれハとてつねに念佛をたにも申」せはそらに三心ハ具足する也されハこそいふに「五六・ウ」かひなきものともの中にも神妙なる往生を」ハする事にてあれ」

一一、臨終の一念と平生の念佛についての問答

問曰臨終の一念ハ百年の業にすぐれたり」と申すハ平生の念佛の中に臨終の一念ほどの」念佛をハ申しいたし候ましく候やらん」

答三心具足の念佛ハをなし事也そのゆへは」觀經にはく具三心者必生彼國といへり必文」[五七・オ]字のあるゆへに臨終の一念とおなし事也」

道光の付記

この問答の問をハ進行集にハ禪勝房の問」といへりある文にハ隆寛律師の問といへり」たつぬへし」

●十二箇條の問答 第二十一

一、念仏往生についての問答

問ていはく念佛すれハ往生すへしといふ事」耳なれたるやうにありなからいかなるゆへ」[五七・ウ]ともしらすかやうの五障の身までもすてら」れぬ事ならハこまかに

おしへさせ給へ」

答ていはくおよそ生しやうし死をいつるおこなひ一つに「あらすといへともまつ極樂ごくらくに往生わうじやうせんとねかへ」彌陀みたを念ねんせよといふ事釋迦しやくか一代たいいの教けうにあまねくす、め給へりそのゆへハ彌陀みたの本願ほんがんを「おこしてわか名號みやうかうを念ねんせん物ものわか淨じやうと土ちにむま「五八・オ」れすハ正覺しやうかくとらしとちかひてすてに正覺しやうかくを「なり給ふゆへにこの名號みやうかうをとなふるものハかな」らす往生わうじやうする也臨終りんしゆの時ときもろくの聖衆しやうしゆと、も「にきたりてかならず迎接かうせうし給ふゆへに惡業あくごう」としてさふるものなく魔縁まえんとしてさまたく「る事なし男女貴賤なんにやきせんをえらはす善人ぜんたにあくにん惡人あくごうを」もわかたす心をいたして彌陀みたを念ねんするにむま「五八・ウ」れすといふ事なしたとへハおもき石いしをふねにのせつれハしつむ事なく萬里ばんりのうみをわたるか「ことし罪業さいごうのおもき事ハ石いしのことくなれと」も本願ほんくわんのふねにのりぬれハ生しやうし死しのうみにしつ「む事なくかならず往生わうじやうする也ゆめくわか身み」の罪業さいごうによりて本願ほんくわんの不ふ思議しぎをうたかはせ給ふへからすこれを他力たうりきの往生わうじやうとハ申す也自力しりき「五九・オ」にて生しやうし死しをいてんとするにハ煩惱ぼんなん惡業あくごうを斷たしつくして淨じやうと土ちにもまいり菩提ぼだいにもいたると習ならふこれハかちよりけわしきミちをゆく「かことし」問といていはく罪業さいごうおもけれとも智慧ちゑの燈ともをも「ちて煩惱ぼんなんのやミをはらふ事にて候なれハかやう」の愚癡ぐぢの身にハつミをつくる事ハかさなれと「五九・ウ」もつくのふ事ハ

二、往生の定不定
定についての間
答

なしなにもてこのつミをけ」すへしとおほへす候ハ又いかん」

答ていはくた、佛の御詞を信してうたかひ」なけれハ佛の御ちからにて往生する也さきの「たとへのことくふねにのりぬれハ目しゐるたる物も」目あきたる物もともにゆくかことし智慧の「まなこある物も佛を念せされハ願力にかなハす「六〇・オ」愚癡のやミふかきものも念佛すれハ願力に乗す」る也念佛する物をハ彌陀光明をはなちてつね」にてらしてすて給ハねハ惡縁にあはすし」てかならず臨終に正念をえて往生するなり」さらにわか身の智慧のありなしによりて往生」の定不定をハさたむへからすた、信心のふか」かるへき也

〔六〇・ウ〕

三、心のけがれ
と念仏について
の問答

問ていはく世をそむきたる人ハひとすちに念佛」すれハ往生もえやすき事也かやうの身には」あしたにもゆふへにもいとなむ事ハ名聞昨日も」今日もおもふ事ハ利養也かやうの身にて申」さん念佛ハいか、佛の御心にもかなひ候へきや」

答ていはく淨摩尼珠といふたまをにこれる水」に投くれハたまの用力にてその水きよくなるか「六一・オ」ことし衆生の心ハつねに名利にそみてにこれる」事かのミつのごとくなれとも念佛の摩尼珠」を投くれハ心のミつおのつからきよくなりて」往生をうる事ハ念佛のちから也わか心をし」つめこのさわりをのそきてのち念佛せよと

四、念仏の数に
ついでの間答

に「ハあらずた、つねに念佛してそのつミをハ」滅すへしされハむかしより在家の人
おほく「六一・ウ」往生したるためしいくハくかおほき心のし」つかならさらんにつ
けてもよくく「佛力をた」のミもはら念佛すへし」

問ていはく念佛ハ數遍を申せとす、むる人も」あり又さしもなくともなんと申す人も
あり」いつれにかしたかひ候へき」

答ていはくさとりもありならふむねもあり「六二・オ」て申さん事ハその心のうちし
りかたけれハ」さためにくし在家の人のつねに惡縁にのミ」したしまれ身にハ數遍を
申さすしていた」つらに目をくらしむなしく夜をあかささん」事荒量の事にや候はん
すらん凡夫ハ縁に」したかひて退しやすき物なれハいかに」もくはけむへき事也さ
れハ處處におほく「六二・ウ」念念に相續してわすれされといへり」

五、妄念と念仏
についての問答

問ていはく念念にわすれざる程の事こそ」わか身にかなひかたくおほへ候へ又手にハ
念珠をとれとも心にハそ、ろ事をのミ思ふこの念佛」ハ往生の業にハかなひかたく
や候はんすらん」これをきらはれハこの身の往生ハ不定なる」かたもありぬへし

「六三・オ」

答ていはく念念にすてされとおしふる事は」人のほとにしたかひてす、むる事なれ
は」わか身にとりて心のおよひ身のはけまん程ハ」心にはからハせ給へし又念佛の時

悪業あくごうの思し」はる、事ことハ一切さいの凡夫ほんふのくせ也なりさりなからも」往生わうじやうの心こころさしありて念佛ねんぶつせ

はゆめくさ」わりとハなるへからすたとへハ親子おやこの約束やくそくを「六三・ウ」なす人ひとい

さ、かそむく心こころあれともさきの約束やくそく」變改へんかいする程ほどの心こころなけれハおなし親子おやこなるか」こ

とし念佛ねんぶつして往生わうじやうせんと心こころさして念佛ねんぶつ」をきやう行ぎやうするに凡夫ほんふなるかゆへに貪瞋とんしんの煩惱ぼんなんお

こ」るといへとも念佛ねんぶつ往生わうじやうの約束やくそくをひるかへさ、れ」はかならず往生わうじやうする也なり」

問といてはくこれ程ほどにやすく往生わうじやうせハ念佛ねんぶつす「六四・オ」るほとの人ひとハミな往生わうじやうすへき

にねかふ物ものもおほ」く念ねんする物ものもおほき中に往生わうじやうする物もののま」れなるはなにのゆへと

か思しひ候こうへき」

答こたへていはく人の心こころハほかにあらはる、事ことなけ」れハその邪正じやしやうさためかたしといへとも

經きやうにハ」三心さんしんを具くして往生わうじやうすと見みへて候こうめりこの心しんを」具くせさるかゆへに念佛ねんぶつすれと

も往生わうじやうをえさる「六四・ウ」也なり三心さんしんと申まをすハ一いちにハ至誠ししやうしん」心しん二にハ深心しんく三にハ迴ま」向かう

發願ほつわんしん」心しん也なりはしめに至誠ししやうしん心しんといふハ眞實しんじしん心しん也なり」と釋しゃくするハ内外ないけと、のほれる心しん也なり何事なにげ

をする」にもま事ことしき心こころなくてハ成しやうする事ことなし」人ひとなみくの心こころをもちて穢土えとのいと

はしか」らぬをいとふ□しをし淨じやうじゆ土とのねかハしから」ぬをねかふ氣色けしきをして内外ないけ

と、のほらぬを「六五・オ」きらひてま事ことの心こころさしをもて穢土えとをもちと」ひ淨じやうじゆ土とを

もねかへとおしふる也なり次に深心しんくといふハ佛ほとけの本願ほんくわんを信しんする心こころ也なりわれハ惡業あくごう煩惱ぼんなんの」

六、往生と念仏
についての問答
―三心

身なれともほとけの願力くわんりきにてかならず往生す」るなりといふ道理たうりをき、てふかく信しんしてつゆ」ちりハかりもうたかはぬ心也人おほくさまた」けんとしてこれをにくみこれをさへきれとも「六五・ウ」これによりて心のはたらかさるをふかき信しんとは」申也次に迴向發願つぎ心こころといふハわか修しゆするところの」行ぎやうを迴向まがして極樂ごくらくにむまれんとねかふ心」也わか行ぎやうのちからわか心のいミしくて往生す」へしとハおもはずほとけの願力りきのいミしく」おハしますによりてむまるへくもなき物も」むまるへしと信しんしていのちおハラハ佛ほとけかな「六六・オ」らすきたりてむかへ給へと思ふ心を金剛こんかうの一切さい」の物にやふられさるかことくこの心をふかく信しん」して臨終りんしゆまでもとおりぬれ八十人八十人なから」むまれ百人ひやくにんハ百人なからむまる、也されハこの」心なき物ハ佛ほとけを念ねんすれとも順しゆん次じの往生わうしやうをは」とけす遠縁えんえんとハなるへしこの心のおこりたる」事ハわか身みにしてるへし人ハしるへからす

「六六・ウ」

七、往生を願う
心の強弱につ
いての問答

問ていはく往生をねかはぬにハあらずねかふ」といふともその心こころ勇猛みやうならず又念佛みやうぶつをいやしと」思ふにハあらず行ぎやうしなからおろそかにして」あかしくらし候へハかゝる身なれハいかにも」この三心具しんじんしたりと申すへくもなしき」れハこのたびの往生をハおもひたへ候へきにや」

答ていはく淨土をねかへともはけしからず「六七・オ」念佛すれとも心のゆるなる

事をなけくハ往生の心さしのなきにハあらす心さしのなき」物ハゆるなるをもなけ
かすはけしからぬを」もかなしみますいそくみちにハあしのおそ」きをなけくいそかさ
るみちにハこれをなけか」さるかことし又このめハおのつから發心すと」申す事も
あれハ漸進に増進してかならず「六七・ウ」往生すへし日ころ十惡五逆をつくれる物
も」臨終にはしめて善知識にあひて往生する」事ありいはんや往生をねかひ念佛を申
し」てわか心のはけしからぬ事をなけかん人を」は佛もあはれミ菩薩もまほりて障り
を」のそき知識にあひて往生をうへき也」

問ていはくつねに念佛の行者いかやうにか「六八・オ」おもひ候へきや」

八、念仏の行者
の思ふべきこと
についての問答

答ていはくある時にハ世間の無常なる事を」おもひてこの世のいくほとなき事をしれ
あ」る時にハ佛の本願をおもひてかならずむか」へ給へと申せある時にハ人身のうけ
かたきこと」はりを思ひてこのたひむなしくやまん事を」かなしめ六道をめくるに人
身をうる事ハ梵「六八・ウ」天より糸をくたして大海のそこなる針のあ」なをとをさ
んかことしといへりある時ハあひかた」き佛法にあへりこのたひ出離の業をうゑす」
ハいつをか期すへきとおもふへき也ひとたひ惡」道におちぬれハ阿僧祇劫をふれとも
三寶」の御名をきかすいかにいはんやふかく信する」事をえんやある時にハわか身の

九、信心をもよ
おす方法につい
ての問答

宿善しゆくぜんをよ「六九・オ」ろこふへしかしこきもいやしきも人ひとおほ」しといへとも佛法ぶつぽう
を信しんし淨土じやうとをねかふ物ハ」まれ也信しんするまでこそかたからめそし」りにくみて惡道あくぢう
の因いんをのミきさすしかるに」これを信しんしこれを貴たひて佛ほとけをたのミ往生ごうじやう」を心こころさすこれ
ひとへに宿善しゆくぜんのしからしむ」る也た、今生こんじやうのはけミにあらす往生ごうじやうの期ごの「六九・ウ」
いたれる也とたのもしくよろこふへしかやう」の事をおりにしたかひ事によりておも
ふ」へきなり」

問ていはくかやうの愚癡ぐぢの身にハ聖教しやうけうをも見」す惡緣あくえんのミおほしいかなる方法かうほうをも
てかわ」か心をまほり信心しんくをももよをすへきや」

答ていはくそのやう一にあらすあるいハ人の苦く「七〇・オ」にあふを見て三途さんづの苦くを
おもひやれあるいは」人のしぬるを見て無常むじやうのことわりをさとれ」あるいはつねに念
佛してその心をはけませ」あるいハつねによきともにあひて心をはちし」しめられよ
人の心ハおほく惡緣あくえんによりてあ」しき心のおこる也されハ惡緣あくえんをハさり善緣ぜんえん」にハち
かつけといへりこれらの方法かうほうひとしな「七〇・ウ」ならす時にしたかひてはからふへ
し」

問ていはく念佛ねんぶつのほかの餘善よぜんをは往生ごうじやうの業ごう」にあらすとして修しゆすへからすといふ事あり
これ」ハしかるへしや」

一〇、念仏と余
善についての問
答

答ていはくたとへハ人のみちをゆくに主人一人につきておほくの眷屬のゆくかことし往生の業の中に念佛ハ主人也餘の善ハ眷屬也しか「七一・オ」りといひて餘善をきらふまでハあるへからず」

問ていはく本願ハ悪人をきらはねハとてこの「ミテ悪業をつくる事ハしかるへしや」答ていはくほとけハ悪人をすて給ハねともこの「ミテ悪をつくる事これ佛の弟子にハ」あらず一切の佛法に悪を制せすといふ事なし悪を制するにかならずしもこれを「七一・ウ」と、めさるものハ念佛してそのつみを滅せよ」とす、めたる也わか身のたへねハとて佛にと「かをかけたてまつらん事ハおほきなるあ」やまり也わか身の悪をと、むるにあたハすハ」ほとけ慈悲をすて給ハすしてこのつみを滅してむかへ給へと申すへしつみをハた、つくるへしといふ事ハすへて佛法にいはさると「七一・オ」ころ也たとへハ人のおやの一切の子をかなしむ」にそのなかによき子もありあしき子もありとも慈悲をなすとはいへとも悪を行する」子をハ目をいからし杖をさ、けていまし」むるかことし佛の慈悲のあまねき事を「き、てハつみをつくれとおほしめすといふ」さとりをなさは佛の慈悲にももれぬへ「七一・ウ」し悪人までをもすて給ハぬ本願としらん」につけてもいよくほとけの知見をハはつへ」しかなしむへし父母の慈悲あれハとて父」母のまへにて悪を行せんにその父母よろこぶ」へしや

一二、人目と念
仏についての問
答

なけきなからすてすあはれミなから」にくむ也ほとけも又もてかくのことし」

問ていはく凡夫ハ心に悪をおもはずといふ事な「七三・オ」しこの悪をほかにあらはさ、るハ佛をはちす」して人目をは、かるといふ事ありこれハ心のま」まにふるまふへしや」

答ていはく人の歸依をえんとおもひてほか」をかきらんハとかあるかたもやあらん悪をし」のはんかためにたとひ心におもふともほか」までハあらハさしとおもひておさへん事ハ「七三・ウ」すなハちほとけに恥る心也ともかくにも悪を」しのひて念佛の功をつむへき也習ひさき」よりあらされハ臨終正念もかたしつねに」臨終のおもひをなして臥すことに十念を」となふへしされハねてもさめてもわする、」事なかれといへりおほかたハ世間も出世も道」理ハたかはぬ事にて候也心ある人ハ父母もあ「七四・オ」はれミ主君もはく、むにしたかひて悪事」をハしりそき善事をハこのまんとおもへり」悪をもすて給ハぬ本願ときかんにまし」て善人をハいかはかりかよろこひ給ハんと思ふ」へき也一念十念をもむかへ給ふときかはいは」んや百念千念をやとおもひて心のおよひ」身のはけまれん程ハはけむへしされハとて「七四・ウ」わか身の器量のかなハきらんをハしらす佛の」引接をハうたかふへからすたとひ七八十の」よはひを期すともおもへハゆめのことし」いはんや老少不定なれハいつをかきり

と思ふ」へからすさらにのちを期^こする心^{こゝろ}あるへからす」た、一とすちに念佛すへしと
いふ事その」いはれ一にあらす

〔七五・オ〕

これを見んおりくことにおもひて、」南無阿彌陀佛とつねにとなへよ」

黒谷^{くろたにのしやうにんご}上^{とうろくくわんたい}人語燈録卷第十四

〔一・オ〕

黒谷上人語燈錄卷第十五

黒谷上人語燈錄卷第十五
馱欣沙門了惠集錄

和語第二之五 當卷有三篇二

● 一百四十五箇條 問答第二十二

● 上人と明遍との問答第二十二

● 諸人傳説の詞 第二十四

● 一百四十五箇條 問答 第二十二

〔一・ウ〕

一 一ふるき堂塔を修理して候はんをハ供養し候へきか

答かならず供養すへしといふ事も候ハす又供養して候はんもあしき事にも候ハす

功德にて候へハ又供養せねハとてつミのえあしき事にてハ候はす

一 ほとけの開眼と供養とは一つ事にて候か

〔一・オ〕

答開眼と供養とハ別の事にて候へきをおなし事にしあひて候也開眼と申すハ本體

一、堂塔修理の
供養

二、開眼と供養

ハ佛師ぶつしかまなこをいれひらきまいらせ候を」申候也これをハ事の開眼かいげんと申候也つきに僧そうの佛眼ぶつげんの眞言しんごんをもてまなこをひらき大たい日の眞言しんごんをもてほとけの一切さいの功德くどくを成しやう就しゆ候をハ理りの開眼かいげんと申候也つきに供養くやう「二・ウ」といふハほとけに花香佛供御はなかうぶつぐみあかしなんとを」もまいらせさらぬたからをもまいらせ候を供く養やうとは申候也」

三、真如觀

一この眞如觀しんによくわんハし候へき事にて候か」

答これは惠心ゑしんのと申て候へともわろき物ものにて」候也おほかた眞如觀しんによくわんをハわれら衆生しゆじやうハえせぬ」事にて候そ往生おんじやうのためにもおもはれぬこ「三・オ」とにて候へハ無益むやくに候」

四、理觀はかな わず

一又これに計算けさんして候ところハ何事もむなしと觀くわんせよと申て候空觀くうくわんと申候ハこれにて候なされハ觀くわんし候へきやうハたとへハこの世よのこ」とを執着しちやくして思おもふましきとお

しへて候と」見へて候へハおほやう御ごらんのためにまいらせ候」

答これハミな理觀りくわんとてかなはぬ事にて候也僧そう「三・ウ」のとしころならひたるたにもえせずまし」て女房にやぼうなんとのつや／＼案内あんないもしらさらん」ハいかにもかなふましく候也御たつねまでも」無益むやくに候」

五、七仏の名號

一この七佛ふつの名號みやうかうとなふへき様やうとて人ひとのた」ひて候ま、に信しんし候へハつミはうせ候へきかな」に事もそれよりおほせ候御事ごじハたのもし「四・オ」く候ひてかやうに申

候」

六、師の恩は深し

七、心の乱れるは凡夫のならない

八、陀羅尼

九、仏の母

一〇、赤子の不淨

答これさなくとも候なん念佛にこれらのつミのうせ候ましくハこそ候はめ」

一一文の師をもおろかに申候へハ習ひたる物の「冥加なしと申候ハま事にて候か」
答師の事ハおろかならず候恩の中にふか」き事これにすぎ候ハす

〔四・ウ〕

一心を一つにして心よくなをり候ハすとも」何事をおこなひ候ハすとも念佛ハかりにて「淨土へハまいり候へきか」

答心のみたる、はこれ凡夫の習ひにてちから」およはぬ事にて候た、心を一にしてよく」御念佛せさせ給ひ候ハ、そのつミを滅して」往生せさせ給ふへき也その妄念よりもお「五・オ」もきつミも念佛たにし候へハうせ候也」

一經の陀羅尼ハ灌頂の僧にうけ候へきか」

答法華經のハくるしからす灌頂の僧のう」けさする陀羅尼ハ別の事それハおほし」めしよるな」

一普賢經にほとけの母を念すへしと申候は」

答えさおほへす

〔五・ウ〕

一百日のうちの赤子の不淨か、りたるハ物ま」うてには、かりありと申たるハ」

一一、一念にて
も往生す

一二、『阿弥陀
経』を読む

一三、日所作の
数を定める

一四、念仏は何
にもさわらず

一五、六齋のこ
と

答百日のうちのあか子の不淨ふじょうくるしからす」なにもきたなき物の、つきて候はんハき
たな」くこそ候へ赤子あかこにかきるまし」

一念佛の百萬まんへん遍と百度申してかならず往生」すと申て候にいのちみしかくてはいか、し

〔六・オ〕候へき

答これもひか事に候と百度申てもし候十念ねん」申てもし候又一念ねんにてもし候」

一阿彌陀經十萬くわん卷よみ候へしと申て候はいかに」

答これもよみつへからんにとりての事に候」た、つとめをたかくつミ候はんれうにて

候」

一日所作にっしよきハかならずかすをきわめ候はすとも〔六・ウ〕よまれんにしたかひてよみ念

佛も申」候へきか」

答かすをさため候はねハ懈怠けたいになり候へ」ハかすをさためたるかよき事にて候」

一にらきひるし、をくひてかうせ候はすとも」つねに念佛ハ申候へきやらん」

答念佛ハなに、もさハラぬ事にて候

〔七・オ〕

一六齋さいに時ときをし候はんにハかねて精進しやうしんをし」いかけをしきよき物をきてし候へきか」

答かならず候はすとも候なん」

一六、六齋日の服薬

一一七日二七日なんと服薬し候はんに六齋さいの日にあたりて候はんをはいか、し候へき」

答それちからおよはぬ事にて候されハとて」罪つみにてハ候まし

「七・ウ」

一六齋ハ一生しやうすへく候かなんねんすへく候そ」

一七、六齋は御心による

答それも御心によるへき事にて候いくら」すへしと申事ハ候はず」

一念佛をハ日所作ひのしよさにいくらハかりあて、か申」候へき」

一八、日所作の念仏の数

答念佛のかすは一萬遍へんをはしめて二」萬三萬五萬六萬乃至ないし十萬まで申候也この

「八・オ」なかに御心にまかせておほしめし候はん程」を申させおハしますへし」

一阿彌陀經をハ一日になん卷くわんハかりあて、かよ」み候へき」

一九、『阿彌陀經』読誦の数

答阿彌陀經ハちかひて一生中に十萬卷をた」にもよみまいらせ候ぬれハ決定けつぢやうして往生

す」と善導ぜんたう和尚のおほせられて候也毎日まいにちに十五卷くわん「八・ウ」つ、よめハ二十年に十

萬卷くわんにミち候也三十卷」つ、よめハ十年ねんにみち候也」

二〇、五色の糸

の引き方

一五色のいとハほとけにハひたりにとおほせ候き」わかつてにハいつれのかたにていか、ひき候へき」

答左右さうの手にてひかせ給ふへし」

二一、法文を焼くこと

二二、授戒の和尚と阿闍梨のこと

二三、時(御齋)の功德

一佛ぼつのなをもかき貴たき事をもかきて候を「あたにせしとてやき候ハ罪つみのうるに誦文しゆもんを「九・オ」してやくと申候ハいか、候へき」

答こたさる反故ほんごやき候はんに何條なんてうの誦文しゆもんか候へき」おほかたハ法文ほうもんをかうやまふ事にて候へハもし」やかんなんとせられ候ハ、きよきところにてやか」せ給ふへし」

一戒かいうけ候時とき和尚しやうとなり給へ阿闍梨あしやりとなり」給へと申事の候心え候ハすなにといふ事にて「九・ウ」候ぞ」

答こた和尚しやうと申候ハ戒かいうくる時に法門ほうもんならひた」る師しを申候也阿闍梨あしやりと申候ハまさしく戒かい」をさつくる師しにて候也これをハ羯磨阿闍梨かつまあしやり」と申候也」

一時ときし候ハ功德くどくにて候やらんかならず、へき」事にて候やらん

「十・オ」

答こた時ときハ功德くどくうる事にて候也六齋さいの御時ときそき」も候ひぬへき又御大事たいしにて御やまひなるとも」おこらせおハしましぬへく候ハ、さなくとも」た、御念佛ごねんぶつたにもよく候ハ、それにて」生死しやうじをはなれ淨土じやうどにも往生じやうじやうせさせおハし」まさんする事ハこれによるへく候」

一臨終りんしゆのをり阿彌陀あやうだいの定印ぢやういんなんとをならひ「十・ウ」てひかへ候やらんた、さ候はすとも左右さうの手て」にてひかへ候やらん」

二四、臨終には合掌

二五、臨終に仏
を見まいらする
こと

二六、信心深き
念仏

二七、往生すれ
ばこの世に還る
こと候わず

答かならず定印ちやういんをむすふへきにて候はず」た、合掌かつしやうを本體ほんたいにてそのなかにひかへられ候へし」

「一ちかくてかならずしも見まいらせ候はね」ともとをらかにてひかへ候やらん
「一一・オ」

答とをくもちかくも便宜によるへく候いかなるもくるし候ハす」

「一かならずほとけを見いとをひかへ候はずとも」われ申さすとも人の申さん念佛を
き、ても」死候しにハ、淨土じやうとにハ往生し候へきやらん」

答かならずいとをひくといふ事候はずほとけ」にむかひまいらせねとも念佛たにもす
れは「一一・ウ」往生し候也又き、てもし候それハよくく」信心しんくふかくての事に
候」

「一なかく生死しやうじをはなれ三界さいがいにむまれしと」おもひ候に極樂ごくらくの衆生しゆじやうとなりても又その
縁えんつきぬれはこの世よにむまると申候ハま事」にて候かたとひ國王こくわうともなり天上てんじやうにも
むま」れよた、三界さいがいをわかれんとおもひ候にいかに「一二・オ」つとめおこなひてか
返り候かへハさるへき」

答これもろくのひか事にて候極樂ごくらくへひと」たひむまれ候ぬれハなかくこの世よに返る
事」候はずミなほとけになる事にて候也た、し」人をみちひかんだめにハことさらに

二八、戒を持つ
と思うこと

二九、仏に金箔
をおす

三〇、念仏の所
作を欠く

三一、巻経を畳
む

三二、経を人に
与えること

返る事も」候されとも生死にめくる人にては候ハす三界」をはなれ極樂に往生するにハ念佛にすぎた「一二・ウ」る事ハ候はぬ也よく御念佛の候へき也」

一女房の聽聞し候に戒をたもたせ候をやふ」り候はんすれハとてたもつとも申候はぬハ」いか、候へきた、聽聞のにわにてハ一時もたも」つと申候かめてたき事と申候ハま事にて」候か」

答これハくるしく候はすたとひのちにやふれ「二三・オ」ともその時たもたんとおもふ心にてたもつと」申すハよき事にて候」

一佛の薄をおして又供養し候か」

答さ候はすとも」

一所作をかきて人にし入させ候ハいか、候へき」

答さなくとも候ひなむ」

一卷経を草子にた、むハ罪と申候ハいか、候へき

「一二・ウ」

答つミえぬ事にて候」

一ほとけに具する経をとりはなちて人にもた」ふはつミにて候か」

答ひろむるは功德にて候」

三三、經を一卷
づつ読むは

一部とある經一卷つゝ、とりはなちてよまらんハつミにて候か」
答つミにても候はず

「二四・オ」

三四、仏の厨子
一ほとけに厨子をさしてすゑまいらせてハ供養すへく候か」

答一切あるまし」

三五、常不輕菩薩
一不輕をおかむ事し候へきか」

答このころの人のえ心えぬ事にて候也」

三六、仏教に忌
なし
一七歳の子しにていみなしと申候ハいかに」

答佛教にハいみといふ事なし世俗に申し「二四・ウ」たらんやうに」

三七、仏にか
わを具す
一佛にかハを具し候かきたなく候いか、し」候へき」

答ま事にきたなけれども具せてハかなふ」ましければ」

三八、尼の服薬
一尼の服薬し候ハわろく候か」

答やまひにくふハくるしからすた、ハあし

「二五・オ」

三九、老少不定
一父母のさきに死ぬるハつミと申候ハいかに」

答穢土のならひ前後ちからなき事にて候」

四〇、生前の功徳

一いきてつくり候功徳ハよく候か」

答めてたし」

四一、人の護り

一人のまほりをえて候はんハ供養し候へきか」

答せずともくるしからず」

四二、詐欺師に物を与えるな

一わ、くに物くる、ハつミにて候か

「二五・ウ」

答つみにて候」

四三、経はただ読む

一經をして供養せずともくるしからず候か」

答た、よむ」

四四、經千部

一經千部よみてハ供養し候へきか」

答さも候まし」

四五、懺悔は一心が大切

一懺悔の事幡や花鬘なんとかさり候へきか」

答さらてもた、一心そ大切に候

「二六・オ」

四六、花香の供養

一花香をほとけにまいらせ候事」

答あか月ハ供養法にかならずまいらせ候た、」ははなかめにさしちらしても供養す

四七、経を僧に受けるは

四八、聴聞より念仏

四九、神より仏

五〇、末世の説経師

五一、香を集めること

五二、経をならうこと

五三、還俗の者

へ」し香かハかならずたくへし便たよりあしくハなくとも」

一 經きやうをハ僧そうにうけ候へきか」

答われとよみつへくハ僧そうにうけすとも」

一 聽ちやうもん聞ものまうてハかならずし候へきか

「二六・ウ」

答せすとも中なかくわろく候しつかにた、御」念佛候へ」

一 神かみに後世ごせ申候事いかむ」

答佛ほとけに申すにハすくまし」

一 説經せつきやうし師ハつミふかく候か又妻めにならん物」もつミふかしと申候ハま事にて候か」

答本體ほんたいハ功德くどくうへく候に末世まつせのハつミえつ「二七・オ」へし妻めにならんものハつミ」

一 麝香しゃかうちやうし丁子ていしをもち候ハつミにて候か」

答かをあつむるハつミ」

一 妻めおとこに經きやうならふ事いか、候へき」

答くるしからす」

一 還俗けんそくのものに目を見あはせすと申候はま」事にて候か

「二七・ウ」

答さまてとかすひか事

五四、選俗する

一 選俗を心ならずして候はんハいかに

答あさくや

五五、神仏には
信を本とす

一 神佛へまいらんに三日一日の精進いつれかよく候

答信を本にすいくかと本説なし三日こそよく候ハめ

「二八・オ」

五六、歌詠むこ
と

一 歌よむハつみにて候か

答あなちちにあ候ハした、し罪もえ功徳にもなる

一 さけのむはつみにて候か

答ま事にハのむへくもなけれどもこの世のならひ

五八、肉食

一 魚鳥鹿ハかはり候か

「二八・ウ」

答た、おなしこと

五九、百日精進

一 尼になりて百日精進ハよく候か

答よし

六〇、仏像と経

一 佛つくりて経ハかならず具し候へきか

六一、功德は身
にたえるほど

六二、經と仏

六三、錫杖の偈

六四、忌の日の
ものもうで

六五、念仏の滅
罪

六六、臨終の善
知識

六七、誹謗正法
と五逆

答かならず具すへしとも候はす又具して「もよし」

一 功德ハ身のたふるほど、申候ハま事にて「一九・オ」候か」

答沙汰におよひ候はすちからのたふるほど」

一 經と佛とかならず一度にすゑ候か」

答さも候はすひとつ、つも」

一 錫杖ハかならず誦すへきか」

答さなくともそのいとまに念佛一遍も申へしあま法師こそありく時むしのために

「一九・ウ」誦し候へ」

一 いみの日物まうてし候ハいかに」

答くるしからす本命日も」

一 五逆十惡一念十念にほろひ候か」

答うたかひなく候」

一 臨終に善知識にあひ候はすとも日ころの「念佛にて往生ハし候へきか

「二〇・オ」

答善知識にあはすとも臨終おもふ様なら」すとも念佛申きは往生すへし」

一 誹謗正法ハ五逆のつミにおほくまさりと」申候ハま事にて候か」

六八、死者の剃
髮

答これはいと人のせぬ事にて候」

一 死しにて候はんもの、かミはそり候へきか」

答かならずさるまし

「二〇・ウ」

一心しんに妄念まうねんのいかにも思おもはれ候あいか、し候へき」

六九、妄念と念
仏

答た、よくく念佛ごんぶつを申まさせ給へ」

一 わかれうの臨終りんしゆの物の具ぐまつ人にかし」候あいか、候へき」

七〇、臨終の物
の具

答くるしからす」

一 五色しきのいとうむ事」

七一、五色の糸
を燃もる

答おさなきものにうます

「二一・オ」

一 節ふしある楊枝やうしをハつかはす續帶つぎをひあをきまひ青帶むもん」無文むもんの帶おひするあいむと申候ハ」

七二、臨終の用
具の忌

答くるしからす」

七三、服薬の棉

一 服薬ふくやくのわたハあらひ候ハさらんあいか、候」

答くるしからす」

七四、八斎戒の
時

一 よき物ものをきわろきところあにありて往生わうしやうね」かひ候あいか、候

七五、月経と読経

七六、仏を怨むべからず

七七、食べ物のはばかり

七八、仏法には月経を忌まず

七九、仏法には出産をいまず

八〇、「法華経」と魚くい

「二一・ウ」

答くるしからす八齋戒の時こそさハ候はめ」

一月のハ、かりの時経よみ候いか、候」

答くるしミあるへしと見へす候」

一申候事のかなひ候はぬに候をうらみ」候いか、候」

答うらむへからす縁により信のありなし」によりて利生ハありこの世のちの世佛をた

の「二二・オ」むにハしかす」

一ひるし、ハいつれも七日にて候か又し、の」ひたるハいみふかしと申候ハいかに」

答ひるも香うせなハは、かりなしし、のひ」たるによりていミふかしといふ事ハひか

事」

一月のハ、かりのあひた神のれうに經ハくるし」く候ましきか

「二一・ウ」

答神やは、かるらん佛法にハいます陰陽師」にとはせ給へ」

一子うみて佛神へまいる事百日ハ、かりと」申候ハ大事にて候か」

答それも佛法にいます」

一法華経一品よみさして魚くはずと申」候ハいかに

「三三・オ」

答くるしからず」

八一、經と衣帶

一す、かけをひかけすして經きやうをうけ候事は「いかに」

答くるしからず」

八二、時(御齋)の豆・小豆

一時ときにまめあつきの御れうくハすと申候ハ」ま事にて候か」

答くるしからず

「三三・ウ」

八三、口洗わず念佛申す

一ねてもさめても口くちあらハて念佛申候ハん」はいか、候へき」

答くるしからず」

八四、布施を受けること

一信しんせ施をうくるハつミにて候か」

答つとめしてくふ僧そうハくるしからすせねハ」ふかし」

八五、神のものを食べる

一神かみのあたりの物ものくふハくちなわと申候ハいかに

「三四・オ」

答禰ね宜か神主かみぬしハひとへにその身になるにこそ」さらぬかすこしくハんハおもからし」

八六、僧のものを食べる

一僧そうの物くひ候もつミにて候か」

答つミうるも候えぬも候佛ほとけのもの奉加結縁ほうかけちえん」の物くふハつミ」

八七、念仏だに申さば

一大佛たいふつてんろうし天王寺てんわうじなんとの邊へんにゐて僧そうの物ものく」ひて後世ごせとらんとし候人こうじんハつミカ
「二四・ウ」

答こたうねんぶつ念佛ねんぶつたに申さばくるしからず」

八八、時(御齋)する日の御料

一時ときするあした御れうあまたにむかふい」か、候」

八九、時(御齋)の日の衣の洗濯

答くるしからず」

一時ときのつとめてミそうついかに」

九〇、持戒と精進

答くるしからず」

一戒かいをたもちてのち精進しやうしんいくか、し候

「二五・オ」

答いくかも御心」

九一、聴聞の功德

一聽聞ちやうもんハ功德くどくえ候か」

答功德くどくえ候」

九二、念仏の行者と物もうで

一念佛ねんぶつを行きやうにしたる物か物まうてはいかに」

答くるしからず」

九三、経の廻向と念仏の廻向

一物まうてして経きやうを廻向まかうすへきに経きやうをハよま」て念佛ねんぶつを廻向まかうするくるしからすと申候

ハ「二五・ウ」いかに」

九四、殺生

答くるしからす」

一わか心さ、ぬ魚ハ殺生にてハ候はぬか」

答それハ殺生ならず」

九五、服薬の数

一服薬のす、ハあらひ候へきか」

珠

答あらひあらハすくるしからす」

九六、千手観音と薬師如来

一千手薬師ハものいませ給ふと申いかに

「二六・オ」

答さる事なし」

九七、六齋の忌み

一六齋にいらひるいかに」

答めさ、らんハよく候」

九八、時(御齋)の食いもの

一時のくひ物ハきよくし候へきか」

答れいの定行水も候ましかねて精進も候」ましひきれもた、のおりのにて候へし
時の誦文も女房ハせすともた、念佛を申させ給へ「二六・ウ」さしたる事ありて時
をかきたらハいつの」日にてもせさせ給へ」

九九、三年おが

一三年おかミの事し候へきか」

答さらすとも候なん」

一〇〇、時（御齋）の生飯

一時のさにはハあはせを具し候へきか時の散「飯をハ屋のうゑにうちあけ候へきかかハラ」けにとり候へきかわかひきれのさらにとり候「二七・オ」へきか

答いつれも御心」

一女のものねたむ事ハつミにて候か」

答世世に女となる果報にてことに心うき事也」

一出家し候はねとも往生ハし候か」

答在家ながら往生する人おほし」

一五色のいとをあまたにきりて人にたはんハ「二七・ウ」いか、候へき」

答きるへからす」

一念佛を申候にはらのたつ心のさまぐに候」いか、し候へき」

答散亂の心よにわろき事にて候かまへて」一心に申させ給へ」

一かみつけなからおとこおんなの死候ハいかに

「二八・オ」

答かみにより候ハすた、念佛と見へたり」

一尼の子うミおとこもつ事ハ五逆罪ほど、申」ま事にて候か」

答五逆ほどならねともおもく見へて候」

一〇一、女の妬み

一〇二、在家の往生

一〇三、五色の糸は切るな

一〇四、念仏と立腹

一〇五、有髪のままて死すこと

一〇六、尼

一〇七、尼法師

一 尼法師かみをおほすつみにて候か」

答三 惡道の業にて候」

一 經 佛なんとうり候ハつみにて候か

一〇八、經・仏像を売ること

「二八・ウ」

答つみふかく候」

一人をうり候もつみにて候か」

一〇九、人身売買

答それもつみにて候」

一 精進の時つめきらぬと申又女にかみそ」らせぬと申候いかに」

と剃髪

答ミなひか事」

一 一、祭文
一 われも人もさゑもんかく罪にて候か

「一九・オ」

答すこさ、らんにか罪にて候へき」

一一二、酒の忌み

一 酒のいミ七日と申候ハま事にて候か」

答さにて候されともやまひにハゆるされて候」

一一三、肉食と

一 魚鳥くひてハいかけして經ハよみ候へきか」

読經

答いかけしてよむ本體にて候せてよむハ」功德と罪と、もに候た、しいかけせても

よ」まぬよりハよむハよく候

〔二九・ウ〕

一妻おとこ一つにて経きやうよみ候はん事いかけ」し候へきか」

答これもおなし事本體ほんたいハいかけして」よむへく候念佛ハせてもくるしからす経きやうは」い

かけてよみ候へし毎日まいにちによみ候とも」

一大根たいこんゆ袖ハおこなひには、かりと申候ハいかに」

答は、かりなし

〔三〇・オ〕

一尼あまになりたるかミいか、し候へき」

答経きやうの料紙れうしにすぎもしハ佛ほとけの中にこそハ」こめ候へ」

一尼法師あまほしの紺こんのきぬき候ハいかに」

答よに罪つみうる事にて候」

一物ものまうてし候はんに男女おとこをんなかミあらひせめ」てハいた、きあらふと申候ハマ事候か

〔三〇・ウ〕

答いつれもさる事候はず」

一佛ほとけをうらむる事ハあるましき事にて」候な」

一一四、男女同
衿と読經

一一五、大根・
袖と勤行

一一六、剃髪し
た髪

一一七、紺の衣

一一八、ものも
うでと洗髪

一一九、我が信
のなきを恥ずべ
し

一二〇、八專とものもうで

答いかさまにも佛ほとけをうらむる事なかれ信しん」ある物ものハ大罪たいざいすら滅めつす信しんなき物ものハ小罪せうざいた」にも滅めつせすわか信しんのなき事をはつへし」

一八專せんに物ものまうてせぬと申まをハま事ことにて候まをか

〔三二・オ〕

答こたへさる事候ことはすいつならんからに佛ほとけの耳みみ」きかせ給たまハぬ事ことのなしか候まをへき」

一灸治きうぢの時物ときものまうてせすそのおりのき物もの」もすつると申候まをは」

一二一、灸とものもうで

答こたへこれ又またきハめたるひか事ことにて候まをた、灸治きうぢ」をいたハりてありきなんとをせぬ事ことにてこ」そ候まをへ灸治きうぢのいミある事候ことはす

〔三二・ウ〕

一二二、肉食と往生

一ひるし、くひて三年さんねんかうちに死しに候まをへハ往生おうじやう」せすと申候まをハま事ことにて候まをやらむ」

答こたへこれ又またきわめたるひか事ことにて候まを臨終りんしゆに」五辛ごしんくひたる物ものをハよせすと申まをたる事ことは」候まをへとも三年さんねんまでいむ事ことはおほかた候まをハぬ也なり」

一二三、厄病・出産と死

一厄病やくびやうやミて死しぬる物もの子こうミて死しぬる物ものは」つミと申候まをハいかに

〔三二・オ〕

答こたへそれも念佛ねんぶつ申まをせハ往生おうじやうし候まを」

一二四、孝養

一子この孝養けうやうおやのするハうけすと申候まをいかに」

答ひか事なり」

一二五、仏教に

は忌みなし

一産さんのいミいくかにて候そ又いミもいくかにて候そ」

答佛教ぶつぎょうにハいミといふ事候はす世間せけんには産さんは」七日又三十日と申けに候いみも五十日

と申す」御心に候

「三三・ウ」

一二六、逆修

一没後もつこの佛經ぶつぎやうしをく事ハ一定ちやうすへく候か」

答一定ちやうにて候すへく候」

一二七、所作と
懈怠

一所作しよさかきてしいれかねてか、んするをまつ」し候ハいかに」

答しいる、ハくるしからすかねてハ懈怠けたい也」

一二八、老若の
出家

一出家しゆけハわかきとおひたるといつれか功德くどくにて候」

答老おいてハ功德くどくハかりえ候わかきハなをめてた「三三・オ」く候」

一二九、誦文よ
り念仏

一佛ほとけに花はなまいらす誦文しゆもん十波羅密じつぱらみつ往生じやうじやうす」と申て候御らんのためにまいらせ候」

答これせんし念佛ねんぶつを申させ給へ」

一三〇、忌みの
ものもうで

一いみの物のものへまいり候事ハあしく候か」

答くるしからす」

一三一、ものも
うでと精進落し

一物まうてして返かえりきにわかもとへ返かへらぬ「三三・ウ」事ハあし又魚鳥いそどりにやかてみたれ

候事いかに」

答熊野くまののほかハくるしからす」

一時ときのおりの誦文しゅもんハかくし候へしと申候御」らんのためにまいらせ候」

一三二、時（御齋）のおりも念仏

答時ときのおりもた、念佛を申させ給へ女房にょぼう」ハ誦文しゅもんせすとも」

一三三、女の妬みにも念仏

一女房にょぼうの物ねたミの事されハつミふかく「三四・オ」候な」

一三四、桐の灰を髪につけると

答た、よくく一心しんに念佛を申させ給へ」

一桐きりのはいかみにつくるハ佛ほとけ神かみに申事のか」なはぬと申候ハま事にて候か」

一三五、精進三日

答そら事なり」

一物へまいり候精進しやうしん三日といふ日まいり候へきか」四日のつとめてか

「三四・ウ」

一三六、ものごもり

答三日のつとめてまいる」

一物ごもりして候に三日とおもひ候はんハ四日」になして七日とおもひて候はんハ八日にな」していて候へきか」

答それハ世の人のせんやうに」

一三七、数珠の材料

一す、にハさくらくりいむと申候ハいかに」

答さる事候はず

「三五・オ」

一三八、法師の罪

一法師のつミハことにふかしと申候ハ」

答とりわき候はず」

一三九、現世の祈りの験

一現世をいのり候にしるしの候はぬ人ハいかに」候そ」

答現世をいのるにしるしなしと申事佛の」御そら事にハ候はずわか心の説のことくせぬに」よりてしるしなき事ハ候也されハよくするに「三五・ウ」ハミなししハ候也観音を念するにも一心に」すれハしるし候もし一心なけれハしるし候」はずむかしの縁あつき人ハ定業すらなを」轉すむかしもいまも縁あさき人ハちりハか」ものくるしみにたにもしるしなしと申て」候也佛をうらみおほしめすへからすた、こ」の世のちの世のために佛につかへむにハ心を「三六・オ」いたしま事をはけむ事この世もおもふ事」かなひのちの世も浄土にむまる、事にて」候也しるしなくハわか心をはつへし」

一建仁元年十二月十四日けさんにいりてとひ」まいらする事」

一四〇、仏は淨不淨を沙汰せず

臨終の時不淨のもの、候にハ佛のむかへにわ」たらせ給ひたるも返らせ給ふと申候ハ
ま事「三六・ウ」にて候か」

答佛のむかへにおハしますほとにてハ不淨」のものありといふともなしハ返らせ給

へき」佛ほとけハきよきたなきの沙汰さたなしミなき」れとも觀くわんすれハきたなきもきよきよ

き」もきたなくしなすた、念佛ねんぶつそよかるへき」きよくとも念佛ねんぶつ申まをさ、らんらんにハ益やくなし

「三七・オ」萬事ばんじをすて、念佛ねんぶつを申まをすへし證據しやうこのミお」ほかり」

一これハ御文ごぶんにてたつね申まをす家のうちのもの、」したしきうときをきはす往生じやうじやうのためと」おもひてくひ物ものき物ものたはんハ佛ほとけに供養くやうせん」とおなし事ことにて候まをか」

答こたへしたしきうときをえらはす往生じやうじやうのため「三七・ウ」とおほしめして物ものたひおハしまさんめてた」き功德くどくにて候御ごつかひによく申候まをぬ」

一破戒はかいの僧愚癡そうぐちの僧供養そうくやうせんも功德くどくにて」候まをか」

答破戒はかいの僧愚癡そうぐちの僧そうをすゑの世よにハ佛ほとけの」ことくとむへきにて候也まをこの御ごつかひに申まを」候ぬきこしめし候へ」

「三八・オ」

この御ごことハ、上人じやうじんのまさしき御手ごて也なりあミタ」經きやうのうらにおしたり」

一見參けんさんにいりてうけ給たまハる事」

毎日まいにちの所作しよさに六萬十萬むむじゆばんの數遍すへんをす、をくりて」申候まをはんと二萬三萬まんさんばんをす、をたしかにひと」つつ、申候まをはんといつれかよく候へき」

答凡夫ほんふのならひ二萬三萬まんさんばんあつとも如法によほうにハ「三八・ウ」かなひかたからんた、數遍すへんの

一四一、布施と
仏への供養

一四二、僧への
供養

一四三、毎日の
所作は數遍を勧
む

一四四、真言教
の弥陀と浄土教
の弥陀

一四五、魔悪修
善と念仏

おほからんに「ハすくへからす名號を相續せんため也かな」らすしもかすを要とす
るにハあらずた、「つねに念佛せんかため也かすをきためぬハ」懈怠の因縁なれハ數
遍をす、むるにて候」

一眞言の阿彌陀の供養法ハ正行にて候へ」きか

「三九・オ」

答佛體ハ一つにハにたれともその心不同なり」眞言教の彌陀ハこれ己心の如來ほか
をたつ」ぬへからすこの教の彌陀ハこれ法藏比丘の成」佛也西方におハしますゆへに
その心おほき」にことなり」

一つねに悪をと、め善をつくるへき事をおも」はへて念佛申候はんとた、本願をたの
むは「三九・ウ」かりにて念佛を申候はんといつれかよく候へき」

答廢惡修善ハ諸佛の通戒なりしかれと」も當時のわれらハミなそれにハそむきたる」
身ともなれハた、ひとへに別意弘願のむね」をふかく信して名號をとなへさせ給ハ
んに」すき候まし有智無智持戒破戒をきらハ」す阿彌陀ほとけハ來迎し給事にて候也
「四〇・オ」御心え候へ」

●上人と明遍との問答 第二十三

末代の凡夫、念
仏して生死をは
なる

心の散るは源空
も力及ばず

多く念仏するが
第一

散心ながら申す
念仏

明遍問たてまつりての給ハく末代惡世の「われらかやうなる罪濁の凡夫いかにして

か」生死をはなれ候へき」

上人答ての給ハく南無阿彌陀佛と申して「極樂を期するハかりこそしえつへき事と

「四〇・ウ」存して候へ」

僧都のいはくそれハかたのやうにき候へきか」と存して候それにとりて決定をせん

料」に申つるん候それに念佛ハ申候へとも心」のちるをはいか、し候へき」

上人答ていはくそれハ源空もちからおよ」ひ候はず

「四一・オ」

僧都のいはくさてそれをはいか、し候へき」

上人のいはくちれとも名を稱すれハ佛願力」に乗して往生すへしとこそ心えて候

へ」た、詮するところおほらかに念佛を申」候か第一の事にて候也」

僧都のいはくかう候くこれうけ給ハりにま」いりつる候とこれより前後にはいさ、かも

「四一・ウ」

上人又僧都退出の、ち當座のひしりたち」にかたりての給ハく欲界散地にむまれた」

る物ハミな散心ありたとへハ人界の生をう」けたる物の目鼻のあるかことし散心を」
すて、往生せんといはん事そのことハリし」かるへからす散心ながら念佛申す物か
往」生すれハこそめてたき本願にてハあれこの「四二・オ」僧都の念佛申せとも心の
ちるをハいか、すへ」きと不審せられつるこそいはれすおほゆれ」と云

● 諸人傳説の詞 第二十四
付 御歌

読經より念仏
(隆寛律師)

色相觀より念仏
(乘願上人)

念仏相續すれば
三心は具す(乘
願上人)

隆寛 律師のいはく法然上人の、給ハく源」空も念佛のほか毎日阿彌陀經を三」
卷よミ候き一卷ハ唐一卷ハ吳一卷ハ訓なり「四二・ウ」しかるをこの經に詮するとこ
ろた、念佛」申せとこそとかれて候へハいまハ一卷もよみ」候はす一向念佛を申候也
と隆寛 毎日阿彌陀經四十八」れきすなハち心えてやかて阿彌陀經をさ」しをきて念佛三萬遍を
申しきとよりいて」云云 たり
乘 願 上人のいはくある人問ていはく色相觀 「四三・オ」は觀經の説也たとひ稱
名の行人なりとい」ふともこれを觀すへく候かいかん」
上人答ての給ハく源空もはしめハさるいた」つら事をしたりきいまはしからす但信
の」稱名也と授手印決答」
又人目をかさらすして往生の業を相續すれ」ハ自然に三心ハ具足する也たとへハ葦の

蓮台に乗るまで
は（乘願上人）

善導大師の心
よる（信空上
人）

念仏往生の旨を
知らざらん程は
これを学すべし

しけき「四三・ウ」いけに十五夜の月のやとりたるハよそにては「月やとりたりとも
見へねともよくくたちよ」りて見れハあしまをわけてやとる也妄念のあしハし
け、れとも三心の月ハやとる也こ」れハ故上人のつねにたとへにおほせられし」事也
とよりの二十八問答」

ある時又の給ハくあはれこのたひしおほせハ「四四・オ」やなとその時乘願申さく
上人たにもかやう」に不定けなるおほせの候はんにはましてその「餘の人ハいか、候
へきとその時上人うちわらひ」ての給ハく蓮臺にのらんまでハいかてかこの「おもひ
ハたえ候へきと閑亭問答集よりいてたり」

信空上人のいはくある時上人の給ハく淨土の「人師おほしといへともミナ菩提心を
す、めて「四四・ウ」觀察を正とすた、善導一師のミ菩提心なく」して觀察をもて
稱名の助業と判す當世」の人善導の心によらすハたやすく往生をう」へからす雲鸞道
綽、懷感等ミナ相承の「人師なりといへとも義においてハいまたかなら」すしも一準
ならずよくくこれを分別す」へしこのむねをわきまへすハ往生の難易に「四五・
オ」おいて存知しかたき物也と」

ある時間ていはく智慧のもし往生の要事」となるへくハ正直におほせをかふりて修
學を」といとなむへし又た、稱名不足あるへからすは」そのむねを存すへく候た、い

食、菩提を妨げず、心、よく菩提を妨ぐ

念仏の相統する
ようにあいはか
らうべし

まのおほせを如^{によ}「來^{らふ}の金言^{きんげん}と存^{ぞん}すへく候^{けう}」

答^{こたへ}ていはく往生^{じやうじやう}の業^{ごう}ハこれ稱名^{せうみやう}といふ事釋^{じやく}「四五・ウ」文分明^{もんぶんみやう}也^{なり}有智無智^{うぢむぢ}をきらはすといふ事又^{また}「顯然^{けんぜん}也^{なり}しかれハ往生^{じやうじやう}のためにハ稱名^{せうみやう}足ぬとす」學問^{がくもん}をこのまんとおもはんよりハた、一向念^{いかうねん}佛^{ぶつ}して往生^{じやうじやう}をとくへし彌陀觀^{みたくわん}音勢^{おんせい}至^しに「あひたてまつらん時^{とき}いつれの法文^{ほうもん}か達^{たつ}せさらん」かのくにの莊嚴^{じやうげん}晝^{しゆ}夜^や朝^{あさ}暮^{ゆふ}に甚深^{しんく}の法門^{ほうもん}を」とく也^{なり}念佛^{ねんぶつ}往生^{じやうじやう}のむねをしらさらん程^{ほど}は「四六・オ」これを學^{がく}すへしもしこれをしりなはいくハく」ならざる智慧^{ちゑ}をもとめて稱名^{せうみやう}のいとまを」さまたくへからす」

ある時間^{とき}ていはく人おほく持齋^{ちさい}をす、む」この條^{てう}いかん」

答^{こたへ}ての給^{たまは}ハく尼法師^{あまほうし}の食^{しき}の作法^{さほう}ハもとも」しかるへしといへとも當世^{たうせい}ハ機^きすてにおとろへ「四六・ウ」たり食^{しき}すてに成^{けん}したりこの分齊^{ぶんさい}をもて」一食^{しき}せは心^{こころ}ひとへに食事^{しきじ}をおもひて念佛^{ねんぶつ}」しつかならし菩提心經^{ぼだいしんきやう}にいはく食苦^{しきほ}」提^{たい}をさまたけす心^{こころ}よく菩提^{ぼだい}をさまたくと」いへりそのうゑハ自身^{みづかみ}をあひはからふへき」なりと」

ある時間^{とき}ていはく往生^{じやうじやう}の業^{ごう}においてハおもひ「四七・オ」さためおハリぬた、し一期^ごの身のあり」さまをはいかやうにか存^{ぞん}し候^{けう}へき」

答^{こたへ}ての給^{たまは}ハく僧^{そう}の作法^{さほう}ハ大小^{たいけう}の戒律^{かいりつ}ありしかりといへとも末法^{まつぽう}の僧^{そう}これにした」かはす源空^{げんくう}これをいましむれともたれ」の人^{ひと}かこれにしたかふた、詮^{せん}するところ」ハ念

諸仏の通誠と別
意の弘願

仏の相好を観ず
ともさらに如説
の観にはあらじ

衆生称念必得往
生と知れ

佛の相續するやうにあひはからふへし「四七・ウ」往生のためにハ念佛すてに正業
也かるかゆへ」にこのむねをまほりてあひはけむへきなり」

ある人間ていはくつねに廢惡修善のむ」ねを存して念佛するとつねに本願のむ」ねを
おもひて念佛するといつれかすくれて候」

答ての給ハく廢惡修善はこれ諸佛の通誠」なりといへとも當世のわれらことく違
背「四八・オ」せりもし別意の弘願に乗せすは生死を」はなれかたきものか」

ある人間ていはく稱名の時心をほとけの相好」にかけん事いかやうにか候へき」

答ての給ハくしからすた、若我成佛十」方衆生稱我名號下至十聲若不生者不
取」正覺彼佛今現在世成佛當知本誓重願不「四八・ウ」虚衆生稱念必得往生と
お

もふハかり也われ」らか分齊をもて佛の相好を觀すともさらに」如説の觀にハあらし
た、ふかく本願をた」のミて口に名號をとなふるこの一大事のミ假」令ならさる行
也」

ある人間ていはく善導本願の文を釋し給」に至心信樂欲生我國の安心を略し給ふ事
「四九・オ」なに心かあるや」

答ての給ハく衆生稱念必得往生としりぬれ」は自然に三心を具足するゆへにこのこ
とハりを」あらはさんかために略し給へる也」

ただ數遍の多からんにしからず

ある人問ていはく毎日の所作に六萬十萬等の「數遍をあて、不法なると二萬三萬の數遍を」あて、如法なるといつれをか正とすへき

〔四九・ウ〕

答ての給はく凡夫のならひ二萬三萬をあつと「いふとも如法の義あるへからすた、數遍のおほ」からんにしからず詮するところ心をして相續せしめんかため也かならずしもかすを沙汰する」を要とするにハあらずた、常念のため也數遍」をさためさるハ懈怠の因縁なるかゆへに數」遍をす、むる也

〔五〇・オ〕

浄土門の修行は愚痴に還りて極樂に生まる（信空上人）

ある人問ていはく上人の御房の申させ給御念」佛ハ念念ことにほとけの御心にあひかなひ候」らんとおほへ候智者にてましませはくハしく」名號の功德をもしろしめしあきらかに本」願のやうをも御心えあるかゆへにと」

答ての給はくなんち本願を信する事ま」たしかりけり彌陀如來の本願の名號ハ木「五〇・ウ」こりくさかりなつミみつくミのたくひことき」のもの、内外ともにかけて一文不通なるかとな」ふれハかならずむまるなんと信して眞實に」欣樂してつねに念佛申を最上の機とすも」し智慧をもて生死をはなるへくハ源空な」んそ聖道門をすて、この淨土門におもむく」へきまさにしるへし聖道門の修行ハ智慧「五一・

阿弥陀仏はまた
く風情もなくた
だ申すことなり

われはこれ烏帽
子もきざるおと
こなり（鎮西上
人）

法然上人の御誓
言（鎮西上人）

「オ」をきわめて生しやうし死しをはなれ淨しやうと土門もんの修行しゆぎやうは「愚癡ぐちに返かへりて極樂ごくらくにむまると
已上しんくう信空しんくう上人じやうしやうの「行集ぎやうしゆより」
傳説でんせつなり進しん いてたり

信空しんくう上人じやうしやう又またいはく先師せんし法然ほうねん上人じやうしやうあさゆふおし」へられし事こと也念佛ねんぶつ申まをにハまたく様やうもな
し」た、申まをせは極樂ごくらくへむまるとしりて心こころをい」たして申まをせハまいる事こと也ものをしらぬ
うゑ「五一・ウ」に道心だうしんもなくいたつらにそへなき物ものの、いふ事」也さいはん口くちにて
阿彌陀佛あみだぶつを一念十念にに」ても申まをせかしと候まをひし事こと也又御往生ごおんじやうの、ち」三井寺さんみいでらの住心房ぢゆうしんぱう
と申まをす學生がくしやうひしりにゆめの」うちに問とれても阿彌陀佛あみだぶつハまたく風情ふうせもな」くた、申
す事こと也と答こたへられたりと大谷おほたにの月くわつ」忌との導師だうしせらるとておほくの人なかの中なかにて「五一・
オ」説法せつぽうにせられ候まをきと白川しらかわ消息せうしより」

辨阿上人べんあのいはく故上人この給たまはくわれハこれ烏こ帽ぼう子しもきざるおとこ也十惡じやくの法然房ほうねんぱう
か念佛ねんぶつ」して往生おんじやうせんといひてゐたる也又愚癡ぐちの」法然房ほうねんぱうか念佛ねんぶつして往生おんじやうせんといふ
也安房あはの」介すけといふ一文不通もんふつうの陰陽師おんやうしか申まをす念佛ねんぶつと源げん」空くうか念佛ねんぶつとまたくかわりめな
しと物語集ものかたりしゆに
いてたり

〔五二・ウ〕

ある時間じかんていはく上人じやうしやうの御念佛ごねんぶつハ智者ちしやにて」ましませハわれらか申まをす念佛ねんぶつにハまさり

一丈の堀を越え
んと思わん人は
一丈五尺を越え
んと勵むべし

一枚起請文

て」そおハしまし候らんとおもはれ候ハひか事」にて候やらん」

その時上人御氣色あしくなりておほせられ」ていはくさハかり申す事を用ゐ給ハぬ事」よもしわれ申す念佛の様風情ありて申「五三・オ」候ハ、毎日六萬遍のつとめむなしくなりて」三惡道におち候ハんまたくさる事候はず」とまさしく御誓言候しかハそれより辨阿ハ」いよ／＼念佛の信心を思ひきためたりき 同集」

又人ことに上人つねにの給しハ一丈のほりを」こへんとおもはん人ハ一丈五尺をこへんとはけ」むへし往生を期せん人ハ決定の信をとりて「五三・ウ」あひはけむへき也ゆるくしてハかなふへか」らすと 同集」

又上人の、給ハく念佛往生と申す事ハもろこ」しわか朝のまろ／＼の智者たちの沙汰し」申さる、觀念の念佛にもあらず又學問を」して念佛の心をさとりとほして申す念」佛にもあらずた、極樂に往生せんかため「五四・オ」に南無阿彌陀佛と申てうたかひなく往生」するそとおもひとりて申すほかに別の事」なした、し三心そ四修そなんと申す事」の候ハミな南無阿彌陀佛ハ決定して往生」するそとおもふうちにおさまれりた、南無」阿彌陀佛と申せハ決定して往生する事」なりと信しとるへき也念佛を信せん人は「五四・ウ」たとひ一代の御のりをよく／＼學しきハめ」たる人なりとも文字一もしらぬ愚癡鈍根」の不覺の身になして尼入道の無智のとも」からにわか身を

三心・五念・四
修も南無阿弥陀
仏（鎮西上人）
法然上人の求法
と回心

おなしくなして智者ふる」まひせすしてた、一向に南無阿彌陀佛」と申てそかなはん
すると 同集

又上人の、給ハく源空か目にハ三心も南無阿彌「五五・オ」陀佛五念も南無阿彌陀佛
四修も南無阿彌陀「佛なりと授手印に
いてたり」

又上人かたりての給ハく世の人ハミな因縁あり」て道心をハおこす也いはゆる父母兄
弟にわかれ」妻子朋友にはなる、等也しかるに源空ハさせ」る因縁もなくして法爾法
と、

然と道心をおこ」すかゆへに師匠名をさつけて法然となつけ給ひ「五五・ウ」し也
されハ出離の心さしいたりてふか、りし」あひたもろくの教法を信してもろくの

行」業を修すおよそ佛教おほしといへとも詮する」ところ戒定慧の三學をハすきす
いはゆる小」乗の戒定慧大乘の戒定慧顯教の戒定慧密」教の戒定慧なりしかるにわ
かこの身ハ戒行に」おいて一戒をもたもたす禪定において一もこ「五六・オ」れをえ

す智慧において斷惑證果の正智をえ」すこれにて戒行の人師釋していはく尸羅」
清淨ならされハ三昧現前せずといへり又凡夫」の心は物にしたかひてうつりやすし
たと」ふるにさるのこしませ事に散亂してう」こきやすく一心しつまりかたし無漏の

正」智なに、よりてかおこらんやもし無漏の智釵」五六・ウ」なくはいかてか惡業煩
惱のきつなをた、む」や惡業煩惱のきつなをた、すハなんそ生」死」繫縛の身を解脱

たう

たう

する事をえんやかなしき」かな〜いか、せん〜こ、にわかこときハすてに」戒
 定慧の三學のうつわ物にあらずこの三學」のほかにわか心に相應する法門ありやわ
 か身」にたへたる修行やあるとよろつの智者にもと「五七・オ」めもろ〜の學者に
 とふらふしにおしふる」人もなくしめすともからもなししかるあ」ひたなけき〜
 經藏にいりかなしミ〜聖教」にむかひててつからみつからひらきて見し」に善導
 和尚の觀經の疏にいはいく一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念念」不捨者
 是名正定之業順彼佛願故といふ文「五七・ウ」を見えてのちわれらかことくの
 無智の身ハひと」へにこの文をあふきもはらこのことハりをたのミ」て念念不捨の稱
 名を修して決定往生の業」因にそなふへした、善導の遺教を信するの」ミにあらず
 又あつく彌陀の弘願に順せり順」彼佛願故の文ふかくたましるにそミ心にと、」め
 たる也その、ち惠心の先徳の往生要集の「五八・オ」文をひらくに往生之業念佛爲
 本といひ又惠」心の妙行業記の文を見るに往生之業念佛爲」先といへり覺超僧都惠
 心僧都にとひての給」ハくなんちか所行の念佛ハこれ事を行すとや」せんこれ理を行
 すとやせんと惠心僧都こたへ」ての給ハく心萬境にさへきるこ、をもてわれた、」
 稱名を行する也往生の業にハ稱名もともたれ「五八・ウ」りこれによて一生中の念
 佛そのかすをかなかへ」たるに二十俱胝遍也との給へりしかれハすなハち」源空ハ大

念仏の相統せられん人はわれ三心を具したりと知るべし（禪房）

往生の得否はわが心に占え（禪房）

われ一人決定して念仏往生せん（禪房）

唐の善導和尚のおしへにしたかひ本朝の恵心の先徳のすゝめにまかせて稱名念佛の「つとめ長日六萬遍也死期やうやくちかつくによ」て又一萬遍をくわえて長日七萬遍の行者なりと徹選擇に

〔五九・オ〕

禪房のいはく上人おほせられていはく今度の生に念佛して來迎にあつからんうれしきよとおもひて踊躍歡喜の心のおこりたらん一人ハ自然に三心ハ具足したりとしるへし念佛申ながら後世をなげく程の人ハ三心不具の人也もし歡喜する心いまたおこらずハ漸漸によるこひならふへし又念佛の相讀せ〔五九・ウ〕られん人ハわれ三心具したりとしるへし念佛問答集にいてたり

又いはく往生の得否はわか心にうらなへその占の樣ハ念佛たにもひまなく申されハ往生は決定としれもし疎相にならハ順次の往生ハかなふましとしれこの占をしてわか心をはけまし三心の具すると具せざるとをもしる〔六〇・オ〕へし同集

又いはくたとひ念佛せん物十人あらんか中に九人ハ臨終あしくて往生せずともわれ一人決定して念佛往生せんとおもふへし同集

又いはく自身の罪惡をうたかひて往生を不定に思はんハおほきなるあやまり也されハとてふてかゝりてわろからんとにハあらず本願の手〔六〇・ウ〕ひろく不思議な

年頃習い集めたる智慧は往生のために要にも立つべからず
(禪勝房)

本願の念仏にはひとりだちをさせて助をささぬなり
(禪勝房)

仏の来迎は法爾道理
(禪勝房)

る道理を心えんかため也され」は念佛往生の義をふかくもかたくも申さん」人ハつや
く本願の義をしらさる人と心うへ」し源空か身も檢校別當ともか位にてそ往」生ハ
せんするもとの法然房にてハ往生ハえ」せしされハとしころならひあつめたる智」慧
ハ往生のためにハ要にもたつへからすされ「六一・オ」ともならひたりしかひにハか
くのことくし」りたれハはかりなき事也 同集

又いはく本願の念佛にハひとりたちをせさ」せて助をさ、ぬ也助さす程の人ハ極樂
の」邊地にむまるすけと申すハ智慧をも助」にさし持戒をもすけにさし道心をも助」
にさし慈悲をもすけにさす也それに善人「六一・ウ」ハ善人ながら念佛し惡人ハ惡人
なから念」佛してた、むまれつきのま、にて念佛す」る人を念佛にすけさ、ぬとハ申
す也さりなか」らも惡をあらためて善人となりて念佛」せん人ハほとけの御心にな
ふへしかなはぬ物」ゆへにとあらんか、らんとおもひて決定心お」こらぬ人ハ往生
不定の人なるへし 同集

「六一・オ」

又いはく法爾道理といふ事ありほのをハそら」にのほりミつハくたりさまになかる菓
子の中」にすぎ物ありあまき物ありこれらハミな法」爾道理也阿彌陀ほとけの本願ハ
名號をもて」罪惡の衆生をみちひかんとちかひ給たれは」た、一向に念佛たにも申

現世を過ぐべき
様は念仏の申さ
れん様に過ぐべ
し（禪勝房）

せ八佛の來迎ハ法爾」道理にてそなはるへき也 同集

〔六二・ウ〕

又いはく現世をすくへき様ハ念佛の申されん」様にすくへし念佛のさまたけになりぬ
へくハ」なになりともよろつをいとひすて、これを」と、むへしいハくひしりて申さ
れすハめを」まうけて申すへし妻をまうけて申され」すハひしりにて申すへし住所に
て申され」すハ流行して申すへし流行して申され「六三・オ」すハ家にゐて申すへし
自力の衣食にて」申されすハ他人にたすけられて申すへし」他人にたすけられて申さ
れすハ自力の衣食」にて申すへし一人して申されすは同朋と」ともに申すへし共行し
て申されすハ一人」籠居して申すへし衣食住の三ハ念佛の」助業也これすなはち自身
安穩にして「六三・ウ」念佛往生をとけんかためにハ何事もミな念」佛の助業也三途
へ返るへき事をする身をた」にもすてかたけれハかへりみはく、むそか」しまして往
生程の大事をはけミて」念佛申さん身をハいかにもくはく、みた」すくへしもし念
佛の助業とおもはすして」身を貪求するハ三惡道の業となる極樂「六四・オ」往生の
念佛申さんかために自身を貪求す」るハ往生の助業となるへき也萬事かくの」ことし
と 同集

往生のためには
念仏第一なり、
学問すべからず
（沙弥道遍）

沙彌道遍かたりていはく故上人おほせられて」いはく往生のためにハ念佛第一なり

學問がくもんす」へからすた、し念佛往生しんぶつじやうじやうを信しんせん程ほどハこ」れを學がくすへしとしちやうしちやう宗要集しゆやうしゆに
いてたり

〔六四・ウ〕

御歌おんうた
「

阿彌陀佛といふよりほかハつのくにの」なにはの事もあしかりぬへし」
ちとせふるこまつのもとをすミかにて」あミたほとけのむかへをそまつ」
いけのミつ人の心ににたりけり」にこりすむ事さためなければ

〔六五・オ〕

むまれてハまつおもひてんふるさとに」ちきりしものふかきま事を」
あミたふつと申はかりをつとめて」淨土じやうどの莊しやうこん嚴げん見るそうれしき」
しハのとにあけくれか、るしらくもを」いつむらさきのいろと見なさん」
つゆの身ハこ、かしこにてきへぬとも」〔六五・ウ〕こ、ろハおなしはなのうてなぞ」
阿彌陀佛と十こゑとなへてまとろまん」なかきねふりになりもこそすれ」
月かけのいたらぬさとはなけれとも」なかむる人のこ、ろにこそすむ」

黒谷上人語燈録卷第十五

